
星影ロンリーハート

CoconaKid

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星影ロンリーハート

【Nコード】

N8023W

【作者名】

CocconaKid

【あらすじ】

男嫌いの暗い女が騙されて、口説けない女は居ないと賭けをする男と合コンで出会ってしまった。
恋愛をしない女とどこまでもしつこく口説く男の恋の駆け引きバトルが始まった。

しかし二人には明かしたくない素性と秘密があつて……

夜空の星が輝く陰で寂しい心がつきまとう。
恋から恋に泣く人の涙背負って恋愛始末。

（分かる人には分かるキャッチフレーズw）

心に傷を持ち運命に左右される二人の恋はこの先一体どうなる――。

（自サイトにも載せてますがこちらにも掲載してみました）

「うそでしょ！　どうして、教えてくれなかったのよ。そんなことなら無理してでも行っただのに！」

誰もが一週間の始まりを鬱陶しいながらも、またしつかり働こうと無理にやる気を奮い起こしている月曜日の朝のことだった。

突然オフィスの中で野々山優香が爆発するように吼えた。

何事だと周りが振り返ると、優香は男性達の視線に我に返り、肌に塗ったファンデーションがひび割れを起こしそうなくらいに無理に愛想笑いをして体裁を繕う。

目の前にいた横峰留美の袖を引っ張り、部署を出て廊下の一番端にある給湯室へと連れ込んだ。

「ちょっと優香、落ち着いてよ。朝からそんなに興奮しなくても」

「これが落ち着いてられますか。先月辞めた夏生先輩がずっとお膳立てしてくれた合コンだったのよ。夏生先輩は医者と結婚した人よ。その旦那さんの人脈をあてにして合コンをずっとお願いしていたのは私なのに、それなのに先週の金曜日、当日突然男性メンバーが集まらないからってドタキャンになって、合コンの代わりにただ皆でお食事会しましうってことになったんじゃないの？」

「だから、私もそのつもりで食事に行ったら、なんか知らないけど、夏生先輩の旦那さんがお知り合いを三人連れて来て、私もそれが合コンだとは思わなかったのよ」

すごい剣幕で言われると留美は本当のことが言えなかった。それを言えば優香は益々怒り狂ってしまう。

「そんな事って……　なんでそうなるのよ。それで、その三人の男はどんな人たちだったのよ」

優香は納得がいかず、イライラが募りながらもどんな男達が集まったのか気になって仕方がない。

八つ当たりするように聞いてしまう。

それでも幾分おっとりしている留美は優香の性格を理解しているかのように落ち着いて受け答える。

「えっと、一人は夏生先輩の旦那さんのお知り合いのお医者さん、もう一人はコンピューター会社の社長さんで、最後はその社長さんのお友達でお偉いさんっぽいビジネスマンだった」

「それで年は？」

「年？　えーっと、20代後半から30手前くらいだったかな。でもみんな見た目も若くて結構いい感じの人達だった」

「で、あんたの他に女性の参加者は他に誰がいたのよ」

「夏生先輩の友達でもある隣の部署の真理絵先輩とあとケムヨさん」

「ケ、ケムヨ……　ちよっとそれって」

優香がびっくりしたとき、ちょうど給湯室にバケツと雑巾を持ってケムヨが現れた。

「あつ、おはようございます」

ケムヨの挨拶はか細い声でじめっと暗く、お辞儀をしたとき、長

い黒髪がばさつと前に流れて顔を覆うとそれはどこかホラー映画に出てくるような風貌に見えた。

「おはようございます。ケムヨさん。あの時はお疲れさまでした」

留美はにこやかに挨拶を返して合コンの話題を振った。

ケムヨはドキツとして、その話題には触れたくなく逃げるように「はあ」とだけ曖昧に挨拶を返し、そして流しに向かい水道の蛇口から水を出して自分の仕事をし出した。

優香は腹の虫が収まらない中、ケムヨの後ろで不機嫌な顔を見せつけるも、どうせ相手にされなかっただろうと勝手に推測する。

そして色々と頭の中で思いを巡らせていた。

正社員ではないが、優香は派遣でこの会社で働いている。年も24歳と若く、優香はお洒落に気を遣い少し派手目で華がある。自分でも美人な方だと自信を持っていた。

夏生の友達である真理絵は正社員だが少し男勝り。年も28歳でおばさん気がそろそろ漂う。

留美も優香と同じく派遣で年も一緒だが、おっとりとした鈍感さで消極的なところもあり少し芋臭い。

ケムヨはパートタイムで週に2、3日来るだけで、掃除やお茶くみ、コピーと雑用ばかりしていて、派遣よりも蔑んで見られている傾向がある。

年も28歳、おしゃれっ気もなく暗い雰囲気が出て、只でさえ出勤日数が少なく目立たないのに、側にいても全く存在感のない幽霊

扱い。

この三人が合コンで気に入られる確立は低いと思うと優香は少し落着く。

そう思うことで自分をなだめようとしていた。

それでも自分がその場に居なかったのは、最大のミスだと言わんばかりにまた怒りが湧き起こる。

文句と愚痴を言っではけ口を求めたくて、今度は夏生の友達でもある真理絵を探しに向かおうとする。

会社を去ってしまった夏生と連絡を取るには、彼女の友達の真理絵しかないなかった。

自分よりも年上と分かっている、いい条件の男を探すためにはなりふり構ってられないと、再び留美の袖を引っ張る。

「ちょっと優香、落ち着いてよ」

「このままでは気が治まらないのよ。真理絵先輩のところへ行くわよ」

「もう！ いつも強引なんだから。それじゃケムヨさん、また後で良かったらあれからどうなったか教えて下さいね」

最後は早口で言わなければならないほど、留美は優香に引っ張られて行ってしまった。

ケムヨは一人給湯室で、忘れようとしていた合コンの話を留美によって穿り返され益々暗くなっていた。

ため息を漏らしながら、雑巾を力強く絞っていた。

「そのメンバーで合コン？ 誰がそんなところへ行くか」

金曜日の夕方のこと。夏生の主催した合コンのことでも一人巻き込まれた輩がいた。

誰も居ないオフィスの見晴らしのいい窓際のデスクに腰掛けながら携帯電話を持ち、日暮れの景色を高い階から見つめ篠沢将之は面倒臭そうに答えていた。
しのざわまさゆき

元から気難しい性格もあるが、バカにしたように合コンという言葉葉を蔑んで口に出している。

「だから、今日はちょっと趣向が違ったって」

なんとか将之を引っ張り出したいと携帯電話の向こうで楠井貴史くすいたかふみはなだめるように説得に励む。

「何が違うんだよ。貴史の知り合いって医者だろ。もう一人来るそいつの友達も医者でそしてお前はコンピューター会社を経営する社長だ。そして俺は親が経営しているけど一応会社の重役の地位。そんなメンバーが集まるんだぞ。ガツガツした女しか来ないって」

「将之は相変わらず手厳しいというのか、世の中を冷めた目で見ているというのか現実的だね。でも、今回はそういうガツガツしたのは来ないらしいよ。ちょっとした仕掛けをしたんだって」

「なんだよ、仕掛けって？」

「主催した俺の知り合いの奥さんが、一度合コンをキャンセルして女子達だけでお食事会しようってことにしたらしい。なんでも自分が医者と結婚してから合コンしてくれて頼まれてうんざりしてたそう。一度合コンをすると承知したけど、利用されるだけっていうのも嫌だったらしいから、フィルターをかけたっていうこと。だから今日集まってくる女性は合コンだとは思ってないってことなんだよ」

「そうだとすると、なんで俺を無理に誘うんだ。どうせそこに集まってきた女性達も俺達の職業を知れば目の色変えると思うぜ」

「だから、お前を誘うんだ。今回はお前の言う通りにはならないところを見せたい。いつも将之は正しくて、正論を主張して俺はことごとくお前に敵わないから、ちょっとした意地さ。時には間違いもあるということをつからせたいんだ」

「なんだよ、それ」

将之はしょうもない理由だと呆れて鼻から息を漏らし、アホらしいと目の前の景色をぼんやりと眺めていた。

黄昏の空の中、夜のカーテンが光を包み込む前に弱々しい夕日でそこにあるものをセピア色に染めていた。

それを見つめていると、不思議な世界にひきこまれたように将之の心も物悲しくなっていく。

暗くなっていく空に次々と現れる星々の光を見つめ、夜の訪れに張り詰めたものを休めるように将之は携帯から流れてくる貴史の言葉を大人しく聞いていた。

日が暮れると将之は、暗闇の中に自分の心の闇を映し出すように寂しさを目で見てしまう気持ちになる。

拭えない過去の心の傷はいつもこの一日の終わりに夜と共に現れる傾向があつた。

暗さが寂しさを運んでくるように――。

「おい、将之、聞いているのか？」

「えっ、ああ、聞いているよ」

「とにかく参加してくれよ。なんでもすごい変わった子が来る予定らしい。その子滅多に合コンとか行かないらしくて、男に全く興味ないんだとか。それを聞いたら俺にも同じように全く女に興味示さない友達がいるって言っちまってさ、それで面白いから連れて来いって言われちゃってるんだよ。それにそんな女が来るんだったら、将之も拘る性格上確かめずにはいられないだろ」

将之は少し間を置く。夜がそこまで来ている景色に支配されるように、少し心が柔軟になった。

「なんだか訳がわからないが、分かったよ、行つてやるよ。だがもし、誰か一人でも俺達を見てがつつく奴が居れば、俺の勝ちだからな」

「今度は勝負かよ。分かったよ、受けてたとうじゃないか。それならこつちも条件だ。その男に興味のない女を将之が口説けたらお前の勝ちつてことにしてやるよ。その時は、フレンチのフルコースの食事でも高級割烹料理でもなんでも奢つてやる。但しお前が負けたら、俺の会社との取引を社長でもあるお前の親父さんに頼んでくれ

よ」

「ああ、いいだろう。それくらいのゲームがあればこの合コンも楽しくなるだろう。乗ったぜ」

将之は、待ち合わせの場所を聞いて電話を切った。

どうせ自分が勝つとばかりに、デスクの引き出しをあけ、身だしなみのチェックをするために置いてあった鏡を取り出す。

見かけはそんなに悪くない。

そう思いながらさりと伸びた黒髪に手を入れて後ろに流した。

一応謙遜してそんな言い方になるが、本当は女性が放っておけないくらいの精悍な顔をしている。

背も高く、体つきもスポーツをしていると分かるほどにがっちり筋肉もついている。

常に努力を怠らず、自分自身にも厳しく真面目な男だが、いつも冷静に物事を見つめそして頑固でもある。

過去に何度か美しい女性と付き合うこともあったが、自分の地位とお金をあてにするような我儘気質の女性達でもあったので嫌気が差すようになり、真剣に付き合うことは一度もなかった。

時折遊びで適当に付き合えても、結婚願望は全くない。だが集まってくる女は将之の背景が分かるとすぐに結婚を示唆してくるような輩が多かった。

そんな事だから、女性を見るときは気をつけていた。

名の知れた国立大学を卒業し、頭も顔もよく、親が会社を経営し、その跡取候補となれば好条件が揃いすぎて、少し行動を起こせば拒否する女は滅多にいない。

自信過剰という事ではないが、貴史の賭けにまんまと乗せられて将之は「やってやろうじゃないか」と闘争心を燃やしてしまう。

この世の中、金と地位で人の価値が決まったようなもの。それを見せ付けてやるとばかりに、将之は悪ぶっていた。

だがそんなことが馬鹿げていると充分理解しているとばかりに、夜空の星々を瞳は寂しげに捉える。

夜と共に訪れる暗い闇を心の中に入り込ませないように強がっているだけだった。

> i 3 1 4 1 2 — 3 9 8 5 <

『Dear ケムヨちゃん、真理絵と留美ちゃんと私とで一緒にご飯食べよう。場所はいつもの居酒屋ね。仕事終わったらすぐに来て待つてるから』

音野夏生からのメールを受けて、車の後部座席に乗っていたケムヨはため息を一つ吐き、暫く携帯の画面を見つめるも断る理由が見つからない。

『わかった』と簡素に返事を送信してから携帯をしまつと同時に運転手に声を発した。

「用事ができたのでこの先の駅前で降ろして下さい」

「はい、かしこまりました」

サービスが行き届いてますといわんばかりのドライバーの従順な受け答えが爽やかに響く。

車は言われたとおりに駅前でケムヨを下ろした。

たまたまこの日の用事のためにかしこまったスーツを着ていたとは言え、自分らしくないその服装に窮屈さを覚える。皆でご飯を食べるだけだからと着ている物はあまり気にしないで駅に向かっていった。

途中目に付いたコンビニに寄り、化粧落としのクレンジングと洗顔剤を購入する。

その後は販売機で切符を手にして改札口を通り、そしてトイレへ

と向かった。

鏡の前ではお化粧直しをしている人たちが多い中、ケムヨは先ほど購入したクレンジングで化粧を落とし、洗顔剤を使って最後はじやばじやばと顔を洗いすっぴんとなった。

いつも持ち歩いているハンドタオルで顔を拭くとさっぱりしたとばかりに息が漏れる。

後は唇の荒れ防止のためのリップクリームをつけた。

髪をアップにしていた飾りのバレッタを外し、首を横に振ると背中まで届くストレートの長い髪がふわっとなびいた。

イヤリングと腕時計も次々外し、最後は首に巻いていたスカーフも取り除きそれらをバッグに無造作に突っ込む。

ついでに服もカジュアルなものに着替えたかった。

化粧を落としただけでも少しは気が楽になったと、鏡に映るスーツを見つめて仕方がないと我慢を決め込んだ。

お腹の中でキュルキュルと小さな水疱がいくつも湧くように鳴っている。

思わず「お腹すいた」と手で腹部を押さえて小さく呟いた。

空腹には勝てないと、親友の夏生とパートで時々顔を合わす真理絵と留美との食事を少し楽しみにトイレを後にした。

プラットホームに向かい電車を待つ。

それはあくまでも食事をするということだったからケムヨはそこに向かっていた。

居酒屋の店の前で夏生たちと顔を会わせると、とりあえず微笑み、周りの雰囲気にあわせる。

その後は夏生が店の人に予約を入れていると話して、ウェイトレスに店内にどうぞと手をさしのべられた。だが、なぜか集まった人数よりも多い椅子が用意されたテーブルに案内され、ケムヨは嫌な予感を感じだした。

この時期、生ビールが美味しく感じる初夏の季節となった頃で、そういうお酒を扱うお店は会社帰りの人が喉の渴きを癒すためにと集まっていた。

特に金曜日ということもあり、店内は混み合ってるだけに少人数がこのテーブルに通されるのはおかしい。

人数に合わない大きなテーブルを前にして、夏生以外皆キョトンとしてどこに座ればいいか思案していると、夏生が恐る恐る様子を見るようにいい訳をいい始める。

「ごめんね、合コン設定するって言うっておきながら、土壇場で予定変更になって女だけの集まりになっちゃって」

その口調からは責任感も含み、急に都合がつかなくなって予定を変更したことを申し訳ないと謝っているように聞こえたが、実際はまだ何かありそうに恐々と三人に気を遣っている。

「気にしないで。こうやって夏生と一緒にまた会える機会ができて、私は嬉しいよ。新婚生活は楽しんでる？ 今日色々とのろけてくれてオッケーだからね」

新井真理絵が全然気にしてないと夏生に気を遣っている。

仕事を通じて知り合ったが、年も同じ28歳なこともあり、お互い呼び捨てにして仲がよかった。

「そうですよ、先輩。お会いできただけでも私は嬉しいです。会社を結婚退職されてから、寂しかったです。私も新婚生活の話が聞きたいです」

人懐っこいほんわかした笑顔で横峰留美は答えていた。程よく甘えるのが上手で夏生からは特にかわいがられていた。

「そう言つて貰えると嬉しい」

夏生は言葉に甘えてついのおろけてしまいそうだったが、独身三人の前ではにっこりと笑うだけでそれを抑える。

「遠慮しなくていいんですからね。色々と話して下さいよ、先輩」
「そうだよ、私達がいくら独身だからっていつでも気を遣うことないから。夏生が幸せだと私達も元気がでるよね」

真理絵が留美と顔を合わせてにっこりとしていた。

夏生は面倒見もよく、気配りが行き届いていて人に頼られて好かれるタイプであった。

真理絵も留美も夏生の良さをわかっており、夏生もまた二人とはいつも何があっても裏表ない付き合いが心地よく、夏生にとって一緒にいてほっとする友達だった。

だからこの二人にも早く幸せになって欲しいと、この二人に直接頼まれた訳ではないが優香がしつこく頼んできたことをきっかけに

合コンのセッティングを請合ったと言う訳だった。

そしてもう一人、特に幸せになって欲しい人物がいる。

夏生はケムヨに視線を向けると優しく微笑んだ。

「ケムヨちゃん、来てくれてありがとうね。あなたには是非とも来て欲しかった」

「ほんと、ケムヨが居酒屋に来るのは久し振りだよね」

真理絵も付け加える。

「そうですね。ケムヨさん、人前に出るのあまり好きそうじゃないですもんね」

留美も視線を向けた。

ケムヨは戸惑った目を向けて三人を見回して呟いた。

「もしこれが合コンだったら私来なかった……」

仲のいい女子達だけで食事をすると思ったから承諾した訳であった。だが椅子の数が異常に多くてケムヨは夏生を訝しく見つめる。

夏生は目を泳がすように逸らしてどこかしらばっくれていた。

しかしこれ以上、隠しても仕方がないと正直にこれから何が始まるか口を割った。

「そうなのよ、ケムヨちゃんは合コンだと来ないって分かってたから、だから嘘ついちゃった」

「えっ？　嘘ついたってどういうこと」

ケムヨが驚き、鋭い目つきを夏生に投げかける。

「実は、これから夫が友達をつれてここへ来るの」

ケムヨはもちろんだが、真理絵も留美も話が見えないと言葉なく夏生を見つめるだけだった。

夏生は仕掛けのことを正直に話した。

「夏生、やってくれるわね」

真理絵は面白いとばかりに笑い、留美は愛想良く微笑んでいた。

だがケムヨだけは納得ができないとばかりにその場を去ろうとした。

真理絵が咄嗟にケムヨの腕を掴んだ。

「ケムヨ、相変わらずの男嫌いだよ。そんなに毛嫌いしてたら結婚もできやしない。それにもう私達28歳だよ。婚活しなきゃ結婚できないような世の中になってるんだから。しかもあなた、ただのパートで定職にもついてないでしょ。もっと前向きにならないと一生男が寄って来なくて独身のままでいちゃうよ。いいじゃないたまにはこんなハプニングがあっても」

「ちょっと、真理絵！　そこまで言わなくても」

夏生は少し言い過ぎだとけん制する。自分から嘘までついてケムヨを無理に誘っておきながら、不機嫌になっているケムヨを気にしてしまう。

ケムヨは気に入らない話題で逃げるように下を向くと、長い黒髪がばさつと前に垂れて顔をすっぽりと隠してしまい、まるでどっかのホラー映画に出てくるような怨念を持った風貌見えた。

真理絵はそんなケムヨを見ると、自分のことも言えた義理ではないというのに、どうしても口を挟まずにはいられない。

「夏生はいいじゃない。素敵なお医者様の旦那さんゲットして、生活も安定だし、しかもいい年でそんな人と結婚できたんだから。正直私もそうなりたいてやってぱり思うところってあるんだもん。だけどケムヨは人とどこか違ってるし、誰かがアドバイスしてやらないと、このままじゃ一生独身だよ。夏生だって隠れて心配してるじゃない」

「そうなんだけど、でもケムヨちゃんは少しずつリハビリした方がいいというのか、面と向かって言うだけじゃ効果はないの」

「夏生先輩も、真理絵先輩も、ちょっと落ち着いて下さい。ケムヨさん、なんか後ろに魂が浮遊しているような、益々肝試しの飾りみたいになってますけど」

留美に言われて、ケムヨを見れば、前に垂れ下がった髪の毛の隙間から目がぎょろりと覗き込んでいた。

三人は一瞬ぞっとしたが、なんとかその場の雰囲気をよくしようと笑顔を無理に作りこんでケムヨに向けた。

「ケムヨちゃん、ちょっとは笑おうよ。昔はこんなじゃなかったのに」

「私がケムヨと出会ったときはすでにこんなだったけど、夏生、いつからケムヨと知り合いなの？」

真理絵に言われて夏生はちょっと口が滑ったとばかりに少し慌てた。

「以前のケムヨさんって今とどう違うんですか？」

留美も興味があると身を乗り出した。

質問に答えていいものかと夏生がケムヨを見ると、前に垂れた長い髪を掻き分けてケムヨが無表情で答えた。

「私のことはどうでもいいの。この先独身であつても気にしないし、それに私そんなに長生きしないだろうし……」

「ケムヨ！ あんたまさか自殺とか考えてるとか言わないでよ」
真理絵がびつくりして声をあげてしまった。

「真理絵、落ち着いて。ケムヨちゃんはその子じゃないから」
「なんか、ケムヨさんって冷めすぎ。一体なんでそうなっちゃったんですか」

留美は首を傾げて不思議そうに見つめていた。

一人静かなケムヨに対して、周りの三人は踊らされるように声を出していた。

それを見兼ねてケムヨはボソツと答えた。

「あのさ、人生って様々だし、世の中不公平だなんて感じると私にできることってなんだろうって思ったら、自分らしく好きに生きることだなんて、そう思っただけ。私これでも皆が思っている以上にすぐく恵まれてるから、だから自分の好きなことできることに精一杯感謝してるんだけど。例えば恋人が居なくてもすぐく幸せなんだけど」

「そのどこが恵まれてるのよ。ケムヨ、あなたもう少し人間らし

く……」

真理絵がいい掛けた言葉に誰もがそこまで言わなくても思ったとき、助け舟を出すように突然誰かの携帯電話から賑やかな音楽が流れてきた。

夏生がすばやく携帯電話を取り出し受け答える。

どうやら相手は結婚したばかりの夏生の旦那からだった。

「うん、そうなの。真理絵と留美ちゃんとケムヨちゃんが来てくれた。そっちは？ わかった。それじゃ待ってる」

夏生が電話を切ると一番黙っていられない真理絵が代表して質問した。

「旦那さんがここに来るの？」

「うん、今知り合い三人連れてここに向かってるって。というわけで、今日は合コンということだ」

夏生の口から出た合コンの言葉がケムヨに重くのしかかった。

「ねえ、帰ってもいい？」

ケムヨが目を潤わせて夏生に懇願する。

騙してケムヨを呼んだだけに夏生は良心の呵責に苛まれたが、真理絵がカバーするように口を挟んだ。

「ケムヨ、もう覚悟決めたら。とにかく食事するだけでいいじゃない。夏生の旦那さんにも私達の名前伝えちゃったし、今帰るのは失礼だよ」

「ケムヨちゃん、騙したのは悪いと思ってるけど、お願い、今日は私の顔を立てると思って」

夏生は両手を合わせて拝みこんだ。

「なんで夏生の顔を立てるのよ？」

ケムヨが背筋を伸ばし上から訝しげに視線を投げかける。

「あのさ、実は夫が連れてくる方にも一人変わった知人がいるらしく、年収や職業で寄って来る女性を毛嫌いしているらしいのよ。そこでそんな女性は絶対に来ないってうちの夫が言い切っちゃってるから、ケムヨちゃんには是非ここに居てもらわないと困るの」

「ケムヨはそれ以前に男嫌いじゃん」

「真理絵先輩、それって、逆を言えばケムヨさんはこの件に関して

は適任つてことになりますよ。全然何にも興味を示さない」

「もちろん、真理絵も留美ちゃんも常識のある人たちだから、今回はこの三人の中から誰一人欠けてもいやなの」

夏生は付け足した。

ケムヨは眉間に皺を寄せて考え込み、諦めて一番端の席にどさっと着いた。

「今日だけだからね」

夏生の頼みとあればケムヨは断り辛い。

夏生とケムヨの関係も二人にしかわからない何かがありそうだった。

夏生の旦那が知人を連れて来るまでケムヨ以外の三人は好き勝手に話をしていた。

お水を持ってきただけで、まだ注文を聞きに来ないのは、この席が予約席であつて、予め人数が集まるまで関与されない段取りだった。

自分達よりも数の多い椅子が並んでまさかとは思つたが、ケムヨはメールを貰つて断らなかつた自分が一番悪いとこの件についてはすっかり諦める。

気持ちを落ち着かせるために、グラスを手に取り水をぐつと飲み干す。

我慢できないならこの場から去ることも可能だが、夏生に頭を下

げられると普段自分勝手に行動しているケムヨなのに我を貫き通せなくなる。

夏生には弱みを握られているというのか、世話になっていっているのか、いろんな意味で逆らえない立場なところがあつた。

ケムヨが知られたくないと思う事柄を唯一知っている人間だった。そして常に力になってくれる。

一番信頼できる人であり、そこにお互いの家族を含んでの付き合いもあるのだ、姉妹といってもおかしくないかもしれない。

夏生はケムヨの只の友達という訳にはいかない間柄といっている。ここは夏生に従わなければならないと半ば自分自身説得するようにケムヨは覚悟を決めた。

暫くして夏生の目が見開き、入り口の方を見て大きく手を振りだした。

その先には新婚らしく幸せな笑みを妻に向けている音野豪おのこうの姿があつた。

優しい気配りの夏生にふさわしく、夫の豪もそれに負けない人当たりのよさそうな優しさがにじみ出ている。

そんなにハンサムではないが、笑うと益々細くなる垂れ目がとても可愛く見えた。

その後ろに三人の男達が続いている。

一人は少しふくよかだが、背筋がピンと張り、貫禄が漂っていた。名前は澤田義和。眼鏡を掛けてインテリな雰囲気漂うところは、

豪と同じ医者に見える。

その後ろには少し細めだが長身の麻黒い肌の男が続いていた。どこか彫りの深い日本人離れしたような風貌。多少軽っぽくも見えだが、笑うと愛嬌がある。

ノートパソコンの入る鞆を手にしてやってきたところを見ると、コンピューター会社を経営している楠井貴史だった。

最後に一番背が高くがっしりとした体躯、かつこいいがふてぶてしそうな冷めた目つきをして篠沢将之が入って来た。

メンバーがこれで揃い、夏生が主催者らしく指揮を取る。

そして一人一人軽く挨拶をする。

その時将之は誰が変わった女だろうか、目を細めて見極めようとしていた。

そして一人俯き加減で化粧つけもなく暗い雰囲気にも包まれた愛想がない女に気がつく。

こいつに違いないと将之はケムヨにレンズを覗き込んでピントを合わせるような真剣な目つきで視線を固定した。

席に着くとき、将之はケムヨの前に座った。そして口元に笑みを浮かべ爽やかな青年を装いケムヨに熱い視線を送る。

ゲームの始まりを意味していた。

そつただのゲームのつもりだったのだ。

だが将之はこのとき思ってもない事態への扉を開けてしまった。

飲み物を目の前にして女性陣、男性陣と一列になってお互いテーブルを挟んで向かい合っている。

片一方の端は控えめに夏生と豪が夫婦で向かい合い、もう片一方はケムヨと将之が向かい合っていた。

その間に残りのものが挟まれ、真理絵と医者 of 義和、留美とコンピューター会社の社長の貴史が向かい合って座っていた。

豪が改めて自分の連れてきた男達を職業、年齢と共に紹介する。

まずは澤田義和からだった。

豪と同じ医者だと説明し、年は30と続き、そして簡単に本人からの自己紹介が始まる。

将之はその時女性たちの表情を見てやろつと注意深く観察していた。

真理絵はショートヘアということもありサバサバとしたさっぱりした雰囲気があった。自分という個性を良く知っているのか、地をそのまま出したように自分を着飾っているようには見えなかった。

義和の職業を聞いても表情を変えない。それはただのポーカーフェイスなのかもしれないと疑いながらも、時折すかつと笑うその笑顔が男っぽく見えて同志を見るような気持ちになっていた。それが男前にみえ悪くないと思う。

（まずは合格か）

用意していたチェック用紙に印をつけるように将之は心の中で呟

く。

次に留美を観察する。

一生懸命気を遣うように人の話を聞いている。

髪を柔らかな茶色に染めてセミロングでふわっとしている。この中で一番若く見え、その立場をよく理解していると一言わんばかりに控えめな感じで周りから一歩引いたような印象だった。

失礼な態度を取ってはいけないと努力しているのがよく見えた。自分のことよりも人の立場を気にしている様子は好感がもてた。ほっこりと笑うその笑顔は素朴なかわいらしさも漂う。

（おつとり系ってとこだな。こういう女は鈍感な奴が多いがまあまあこれも合格ってところか）

将之のチェックは続く。

そして最後はケムヨ。

俯き加減でその場に参加しなさそうな根暗なタイプだと思ったが、人の話はしっかりと見つけて聞いている。しかもその目は虎視眈眈とはっとするものがあつた。

（まるで今の俺のように中身を見ようと観察している目じゃないか）
人を知ろうと注意深く探るような目。それは仕事で先を見ようと
するビジネスマンのような風貌に見えた。

只者ではなさそうな意外な表情を見たばかりに将之は思わず唾

を飲み込んだ。

将之はこの目に見覚えがあったのだ。過去にこれと同じように野心と向上心を抱かせた力強い目を思い出していた。

将之が観察している間に隣の貴史の紹介もすでに終わり、豪は将之のことを紹介しようとしていた。

貴史から噂は聞いていたが豪も将之とは初対面だったのでどう説明していいか迷っている。

そこで連れてきた貴史が代役を担った。

「こいつ、俺が無理やり今日引つ張ってきました。篠沢将之、26歳。将来有望なビジネスマンなんです。見かけ通りのクールなやつです。ほら後は自分で自己紹介しろ」

貴史は肘で将之をつついた。

ケムヨに氣をとられて我を忘れていた将之ははっとしたように体をビクツとさせたが、その後はすぐに冷静さを取り戻して、落ち着いた話し出した。

「親の会社を手伝ってるだけのビジネスマンですが宜しく願います」

その時ケムヨの目が一層鋭くなったような気がした。

次は女性陣の自己紹介となった。

主催者で結婚もしている夏生は簡単に済ませ、来てくれた感謝の意を表した。そしてその後は順々に友達を紹介し始めた。

真理絵は将之が抱いた印象通りにハキハキと自分のことを簡素に紹介している。自分の年も28歳と恥ずかしいこともなく知らせるはつきりという歯切れのいい声が気持ちいいのか全ての男性陣の印象もいい感じだった。

留美ははにかみながらも笑顔でしつかりと言葉を選んで丁寧に挨拶している。おっとりとはしているが、その中に聡明さが垣間見られ、ほんわかした雰囲気は癒される感じで彼女も印象良く見られていた。

そしてケムヨ。

「ナサ ケムヨです。私のことは気にせず皆さん楽しくやって下さい。以上」

ケムヨの言い切った言葉に一同何も言えず暫く静かになっていた。

「あの、ケムヨさんって、変わった人…… いえ、変わったお名前ですね」

恐々と貴史が一番最初に突っ込んだ。

貴史はケムヨが男性に興味を示さない変わった女だと認識し、これから賭けの対象となる将之が口説く女だと知らせるようにちらりと横目で将之の様子を伺った。

「はい。人物と共に名前も変わってます。『情け無用』と覚えて下さって結構です。その名前の通り私には情け無用で結構です」

「ケムヨちゃん」

夏生はフォローしようとするが、場所が離れて充分にケアできないように、どうしていいのかわからなかった。

「情け無用のケムヨか。面白いな。その名前気に入った」

将之がやりがいのあるゲームだと満面の笑みをケムヨに向けて貴史と約束した勝負に挑む。

将之の言葉に、隣で貴史がこれは面白くなるぞと自分達の賭けの行方に期待してにやっとする。

その様子をケムヨはしっかりと見ていた。

「あ、あの、ケムヨちゃんの名前は……」

夏生が何か言おうとすると、ケムヨが厳しく遮った。

「夏生、余計なこと言わないで」

夏生はケムヨの注意で大人しくする。

益々場がしらけムードになってしまい、真理絵がその場をなごませようと、明るい光を投じるように音頭を取った。

「ちょっと、とにかくまずは飲みましょうよ。さあ、乾杯しましょう」

皆、目の前のグラスを手にして高々と上げ、それに釣られて回りも同じようにしてその辺の人たちと軽くグラスを合わせた。

「ケムヨさんもほら」

将之がにこやかな笑顔を添えてビールが入ったジョッキをケムヨに向ける。

ケムヨは将之をじーっと見てニヤリと笑うとジョッキを持ち上げて将之に力強くぶつけた。

「ケムヨって呼び捨てで結構です。将之さん」

それは将之に挑戦するような態度にも見えた。

何もかも見透かしたような目。根暗で消極的だったと思ったケムヨが積極的に攻撃してくる。

二つの人格がそこに潜んでいるようだった。

「じゃあ、遠慮なくケムヨと呼ばせて頂こう。ついでに俺のことも将之でいいよ。俺の方が二歳年下だしね。でもそんなこと感じさせないように今日はお相手させてもらうよ。合コンだからね。今日は一杯飲んで楽しもう、ケ・ム・ヨ」

「受けて立ちましょう。マ・サ・ユ・キ」

違った意味で二人が意気投合していた。

その後は二人は一気にビールを飲み干した。

「お代わり」

ジョッキを高く掲げ二人が同時に呟いた。

一体何が起こったんだと、周りはあっけにとられていた。

テーブルの端に座るケムヨと将之だけ隔離されたように、異様な空気が流れていた。

それはバリヤーのごとく、口も挟めず、二人の間にも入れず、皆邪魔できず、放って置いた方がいいと二人を好きにさせておいた。

二人のことは気にせず残り残りで楽しく飲んでいる。すっかり割り切っていた。

夏生と豪の新婚生活を肴に同じ医者である澤田和義が二人の馴れ初めの話を暴露している。

素敵とばかりにうつとりと留美が聞き、やるわねと冷やかすように真理絵は夏生をわざと虐めている。

仲がいい女子達の様子をかわいいと男性陣はなごんでいた。

合コンというよりも、夏生と豪を改めてお祝いするような席となり、皆リラックスして会話をしている。

だが、いきなりドンとテーブルを叩く音がしてはつとした。

「さっきから優しい態度で私の機嫌を取ってるみたいね。その齒の浮くような言葉もわざとらしい。いい加減に化けの皮をはがしたら、将之」

「おっと、俺は元々こういう人間なんだけど、どこか気に入らないところがあった？ ケムヨ」

良く見れば、空のジョッキがいくつか並び二人だけ酒のペースが速い。

「ちょっと、ケムヨちゃんどうしたの？ そんなに飲むなんて珍しい」

夏生が心配になりおろおろする。

豪もまた直接連れてきた友達じゃないので妻をフォローできずどうしていいのかわからない。

皆が啞然としていると空気を読んで貴史が将之に落ち着けと腕を抑える。

「おい、将之、一体何してんだ」

「何してるって酒飲んでケムヨと話してるんだけど」

「おい、あの事で自棄になってるんじゃないのか」

貴史は小声で賭けのことを示唆すると、将之は勝負はまだだと反発するように貴史を睨んだ。その態度で凶星だったと貴史は頭を何度か振って呆れていた。

「ケムヨさん、こいつ酔ってるんですよ。気にしないで下さいね」

貴史は意地っ張りな将之が苦戦しているのに気がついてここらで勝負を終わらせようとした。

「酔ってなんかねえよ。ちょっとケムヨを気に入りすぎただけだ」

ここで負けてたまるかと将之はムキになってしまった。

酒も入ってるせいかもしれないが、こんな本気を出した将之を見たことがない。相当の兵だつわものと實史はケムヨに視線を向けた。

ケムヨはジョッキに残っていたビールを一気に飲んだ後、ジョッキをテーブルに置いて口元を少し上向きにさせた。

「相当あなたも変わってるのね。でもその裏に何を考えているかわからない分かってるわよ。こんな私なんか近づこうとするような男はただのカラカイか、または私が……」

「ケムヨちゃん！」

ケムヨの言葉を遮るように夏生が名前を呼ぶ。

「あの、将之さん、すみませんが、ケムヨちゃんも酔ってるみたいです。どうかそつとしてやって下さい。今日は無理やり私が連れてきてしまつて、彼女慣れない席で戸惑ってるんです」

「やだ、ケムヨが酒癖悪いなんて知らなかった。会社では大人しいから意外だわ。でもケムヨを見直したわ。かつこいい人を目の前にしても物怖じせずに絡むなんて、私以上の男っぷり」

真理絵が陽気に茶々をいれる。

「ほんと、ケムヨさん、なんかいつもと雰囲気違います。お酒が入ると強いんですね」

合わせる様に留美も言葉を挟み、そしてニコツとすると場は知らずと和んだ。

「いや、なんか面白くなってきた感じだ。いいね、こういう気持ちいいお嬢さん方を相手に酒を飲むのも。仕事の鬱憤が晴らされる」

義和が言うと、豪は医者立場をわきまえろと頭を軽く叩いていた。

「医者も大変そうですね」

貴史が何か面白い話は聞けないかと期待して突っ込む。

酒を飲んで気が大きくなっていた義和は乗せられたように病院の裏側を面白おかしく語りだした。

それには皆すぐに興味をそそられ聞いてしまう。

そこから話が弾んで話題が飛び交い、いつの間にかケムヨと将之はまた隔離されたようになった。

話に夢中になって笑い声が飛び交う中、冷静になった将之はケムヨに話しかけた。

「さっきは何を言いかけたんだ？ 自分に近づこうとするような男はカラカイともう一つどんな奴だよ」

途中までいいかけられてやめられると物事をはっきりとさせないと気がすまない将之は気になって仕方がない。

「それはあなたが一番良く知ってるんじゃないの？ もういいわ。とにかくあなたのような人が無理に私と話をしようと近寄ってくること事態おかしいと誰だっと思うわよ。甘いマスクで世間で羨ましいとされるステイタスを持っているような男が理由もなく私を相手にすると思う？ あなただって女性が近づいてきたらまずは何か打

算的な理由があるんじゃないかって一番に疑うような人でしょ」

「へえ、よくご存知で。しかしそこまで見抜いているとは少し驚きだ。ああ、そうだな。全くその通りだ」

あつさりとケムヨの言葉を認めた。

「あら、少しは意地の汚い部分があるかと思っただけ意外と素直なところもあるのね」

「お褒め頂き光栄です。ああ、もう黙って置けなくなっただってところかな。あんたは本当に筋金入りだ。俺の誘惑に屈しなかった初めての女だ」

「やっぱりからかっていたってことか」

「いや、そうじゃない。俺はあんたがほんとに気に入った。そのふざけた名前も、予想以上にしぶとい性格も」

「それって喜ぶところ？ それとも怒るところ？」

「そんなことどっちでもいいさ。大切なのは俺が気に入ったってこと。あんたのような女と一度付き合ってみたい。なあ、俺と付き合わないか」

将之は勝負を挑むような目を向けて、そして静かに微笑んだ。

ケムヨは暫くじつとその瞳を見つめていた。

ここでケムヨが付き合うといえ、貴史との賭けは勝ったことになる。

将之にとって一か八かの勝負だった。

これ以上、どんな甘い言葉を並べても、優しい笑顔を向けても、お金を持つてると見せ付けたとしても、ケムヨは絶対になびかない。

将之は自分には手に負えない女だと言うことが充分わかった。

しかもケムヨは一枚上手で、人の本質を見抜くのが取り得と思っていた自分の能力も通用しないほどつかみ所のない女だった。

時折見せる魔力をもったような目には将之も心を覗かれて弱みを掴まれたようにドキッとしてしまう。

貴史の賭けのことも気になったが、ケムヨの内面をもっと知りたいたと反対に興味をそそられてしまった。

付き合いたい。

それは賭けの勝ち負けを気にすることよりも、もつと膨れる好奇心からであり、この女は自分を満足させてくれそうな予感がする。

自分以上の何かを持っている。直感で感じ取った。

化粧っけはなく派手じゃないが、顔は悪くない。むしろすっぴんでも整っている方だ。本気で化粧をすればキャリアウーマンのよう

にキリリとした美しさが想像できる。

ぼさつとしているが、それと似合わない身なりのいい高級そうなスーツがギャップ萌えを感じる。

そして謎めいたところが神秘的だった。

だからこそ、自分に惚れさせたい。

スリリングな恋の駆け引きが味わえ、恋人にするには申し分のない素材だった。

いい返事が聞きたいと将之は微笑んで待っている。

一方ケムヨも将之をじーっと見つめ心の中を探っている。

自分に興味があるのは真剣な澄んだ瞳の色から感じ取れた。照明ライトが入り込むせいか茶色い部分が琥珀色に輝き重みのある視線をケムヨに注ぐ。

そこにはまだ野心という何かに挑戦したい気持ちがありありと現れている。

それが純粹に人を好きだからという恋ではない。

この男はゲーム感覚で恋を楽しむような男。

自分に自信を持ち、それにしがみつくように物事を変えようとする願望。

何かに拘って、それがトラウマとなってこの人物像を形成しているのではとそこまで見ていた。

顔は確にかっこいい。頭も切れるほどに回転もよさそうだった。恋人にしたいと女性が常に憧れる対象。

それは本人も自覚しているのが良く見えるとばかりにケムヨはいきなり笑い出した。

「将之つて面白い。気に入ったわ」

「じゃあ、俺と付き合うつてことなんだな」

「いいえ、それはお断りよ。あまりにも唐突過ぎる展開だわ。それに恋人としては私には釣り合わない」

容赦なく刃物を振りかざしたように突き放す。

将之は言葉を失ったように黙り込んだ。

『恋人としては私には釣り合わない』

この言葉はどっちに視点を置いて言ったのだろうか。

ケムヨが将之に釣り合わないのか。それとも将之がケムヨに釣り合わないのか。

あの言い方では後者に聞こえてしまった。

(この俺がこの女に釣り合わないだと)

将之はこのとき自尊心を傷つけられた。まさかそこまで言われるとは思ってなかった。

思った以上にケムヨは普通の女じゃない。

修羅場をくぐってきた世間を冷めた目で将之を見下ろしている。そこには何かありそうで、将之は腹が立ちながらも意地と興味がどンドン膨らんでいった。

「この俺が振られるなんて、ああ完敗だ。だが俺もここで引き下が

ろうとは思わなくなったよ。合コンで俺を本気にさせてくれた女はあんたが初めてだ。諦めないよ」

「しつこいのね」

「それだけ気に入ったってことだ。それじゃまずは友達からだ。それなら構わないだろ」

「ううん、それも嫌。これ以上私に係わらないで。これでお終い」

「おいっ、ケムヨも俺のこと気に入ったってさっき言ったじゃないか」

「客観的にみたら面白いと思うってこと。それ以上でもそれ以下でもない。私がここまで避けてるんだからいい加減に気がついてほしいな。私に係わると碌なことがないってそれとなく知らせてるつもりなんだけど」

「どういう意味だよ。ケムヨと係わると碌なことがないって。もしやなんか呪いでもかけられて人を不幸にするのか」

「あら、よくわかったわね」

ケムヨは俯き加減になると髪で顔が覆われ、垂れ下がった髪の間から不気味な目つきを将之に見せた。

「ふーん、確かにホラー的センスがある。でも俺も充分不幸は味わってきた。これ以上の不幸があるなら是非見てみたいね。でもその前に俺が君にかけられた呪いをといてやろうじゃないか。俺が君をそこから救ってやるよ」

将之はケムヨに合わすつもりでノリでそのようなことを言ったに違いない。

だが、その言葉は長くしまいこんでいた記憶を引き出すかのよう
に刺激され、忘れていたケムヨの過去の記憶を瞬間的に蘇らせた。

ケムヨは暫しそれに捉われてしまった。

曖昧なぼやけた記憶の中、映写機のスイッチを突然入れられたように昔に出会った男の子の顔がぼんやりと映し出された。

忘れていた記憶は正確な時期までははっきりと蘇らないが、ケムヨが小学生の高学年くらいで自己主張がそろそろ出来るようなおしやまな年の頃だった。

「いつもあの人たちから逃げてるの？」

あどけない瞳の男の子が不思議そうにケムヨを見つめ、小さな声で訊いていた。

ケムヨが「しー」と指を口元に当て息を潜めると、男の子は一瞬にして緊張して体を縮めるように力が入った。

二人はここそと周りを気にするように建物の間の隙間に身を隠し、そこに置かれていたゴミ箱の影でしゃがんでいた。

それに気がつかないで大人が二人ケムヨの名前を呼びながらまっすぐ過ぎ去って行く。

声が遠くなると、ケムヨは建物の影からそっと伺い、去っていった大人達の後姿を確認してから「もう大丈夫」と呟く。

ほっと息をつき、そして二人だけで遊べる場所を求めて用心しながら下町の中を歩き出した。

目が合えば二人はニコツと微笑む。

その男の子と会うときはいつもこんなことを繰り返していた。

そしてある日のこと。ケムヨは手に長方形の箱のようなものを持ち走ってその男の子に会いに来た。

はあはあと息が切れる中、持っていたものを突き出す。

「これマサキ君にあげる」

それは100色ある色鉛筆のセットだった。

「こんなに沢山の色鉛筆をくれるの？」

受け取ったときずっしりとくる重さにマサキと呼ばれた男の子は驚いてしまう。

「これで一杯絵を描いて。私マサキ君の描く絵が大好き。マサキ君、絵を描くのほんとに上手いんだもん。いつか私にも描いてね」

マサキとはどこで知り合ったのか詳細は思い出せないが、絵を通じて仲良くなった友達だった。

マサキは絵を描くのが上手く、偶然それを見たときケムヨは子供心ながら感銘を受けた。

自分も絵を描くのが好きで買ってもらった色鉛筆だったが、この先益々隠れてマサキと会えなくなるのを分かってかケムヨはそれをマサキにあげた。

「わかった。ありがとう。それじゃどんな絵を描けばいい？」

「王子様がお姫様を悪い魔法使いから救ってる絵」

「王子様、お姫様、魔法使い……」

マサキはイメージを浮かばせるように、首を上向きに上げ考えるしぐさをしている。

その時、見つけたと言わんばかりに後ろからケムヨが大人たちに押さえつけられた。

嫌がるケムヨだったが、有無を言わず大人たちに連れて行かれる。まるでそれは悪い魔法使いがお姫様をさらっていくようだった。

マサキは助けたかったが、小さすぎてあまりにも無力すぎた。それでも思いが口から飛び出す。

「僕、いつか助けに行くから、だからまた一緒に遊ぼう」

「マサキ君！」

そして、またマサキに会えることを願っていた。いつか絵を描いて持ってきてくれるとケムヨは信じていた。

だけどそれは叶わぬ夢となった。

マサキは交通事故に遭い、この世から消えてしまったと知ったのはそれから数年後の事だった。

「おい、どうかしたのか？」

視線も合わず、固まって動かずに遠いところを見ていたケムヨの顔に将之は掌をひらひらと振っていた。

「マ…… サキ……」

ケムヨの呟きに将之は「ん？」と首を傾げた。

「それじゃ、次は二次会としてカラオケ行きましょうか」

突然、豪が大きな声を出す。

それにケムヨは我に返ったと同時に将之と目が合った。
慌てて目を逸らし席を立つ。

「私は遠慮しておく。ここまで付き合っただからもういいでしょ、夏生」

夏生もこれ以上引き止めてもケムヨを怒らすだけだと思うと「うん」と首を縦に振った。

会計は仲良く割り勘ということになり、ケムヨは自分の分を夏生に渡し、夏生の旦那を筆頭にこの日出会った男性達にきちつと挨拶をすませていた。

将之にも分け隔てなくビジネスのお手本のような丁寧なお辞儀をして、後は静かに早々と去って行った。

「なんかケムヨさんてかっこいいですね。今日のケムヨさんって会社で見るのと全然違う」

留美が誰に言うわけでもなく自然と口から漏らす。

貴史が少し離れたところで将之に耳打ちする。

「どうやら、俺の勝ちみたいだな」

「ああ、悔しいけど、今日集まったメンバーはお前の言う通りだった。けどまだ俺はアイツの返事を聞いてない。チャンスはこれからだ。俺は今からアイツを追いかける」

そういつて、皆に簡単に挨拶をして将之はケムヨの後を追いかけた。

「将之さん、ケムヨを気に入ったみたいだね」

真理絵は夏生にめでたいつもりで耳打ちする。

夏生は本当にこれで良かったのか心配になってきた。

将之が店を出て辺りを見回したとき、ケムヨは賑やかな繁華街と溢れかえった人ごみの中に溶け込む寸前の先を歩いていた。

将之は人にぶつかりそうになりながらも、人と人の間をすり抜けて走る。

ケムヨは将之が追いかけてきているとも知らず突然立ち止まり、鞆の中から腕時計を取り出しそれを身につけようとしていた。

そんなときに将之に追いつかれて後ろから肩を叩かれたものだから、びつくりして腕時計を左手首に着ける前に落としてしまった。

「あつ」

ケムヨが声を上げると同時に無残にも時計はアスファルトの地面に勢いよくぶつかっていた。

「ごめん、脅かすつもりはなかったんだ。もしかして壊しちゃったかな」

将之はこれは悪かったと思い、すばやく屈んで腕時計を拾った。

女性用だが、どこかずっしりとした重みがあり銀色の淵がピカピカして豪華さがある。壊れてないか確認しようとする前にケムヨが腕時計を引ったくった。

将之は咄嗟のことだったが、その時王冠マークを見たような気が

した。

「もし壊れていたら弁償するよ、だけどその時計まさかロレックス？」

「いいえ、大丈夫です。落としたくらいで壊れるような時計じゃないし、もし壊れていても別に気にしません。では失礼します」

時計は鞆の中にしまいこみ、関わりたくないといそいそとケムヨは先を進む。

「おい、だからちょっと待ってくれ。さっきの話だがまだ返事を聞いている」

将之に腕を引っ張られケムヨは何のことを言っているのか把握できず、困惑した表情で振り向いた。

「えっ？ 一体なんの話？」

「だから、おれが呪いから救ってやるっていうことだよ。俺は呪いなんて気にしないから、友達くらいなってもいいじゃないか」

「まだそんなこと鵜呑みにして言ってるの？ だから私に構わないで欲しいだけ。なんでそうしつこいのよ。あなただったらどんな女も手に入れられるでしょう」

「いや、それがそうじゃないことが分かったよ。ケムヨがそのいい例だ。俺は君みたいな女を待っていたんだ。俺に簡単になびかない女。まさに理想だ」

「はあ？ いい加減にしてよ。まるで私はクレインゲームの商品みたいな扱いね。自分が手に入れるまで意地になってついコインを投じてしまう。私はそんなのに付き合ってる暇はありません」

「面白い例えだ。苦勞してそんな女を手に入れたら楽しいだろうな」

「あなたが楽しくても私は楽しくない。私一生結婚しないつもりだし、男には全く興味ないの」

「へえ、かなり強気なんだな。でも益々気に入っちゃった」

「じゃあ、どうすれば気に入られなくなるの。気に入らない女ってどんな人なのよ」

「そうだな、気軽に俺と寝たいというような女は嫌だな」
「わかった」

ケムヨは将之の腕を引つ張り、スタスタと歩き出した。

「おい、どこへ行くんだよ」

「ラブホテル。あなたと寝たいのよ」

将之は手を引かれながらケムヨの後ろ姿を啞然と見つめていた。
暫くケムヨにされるがままになっている。

そして怪しげな路地にさしかかり、その先には派手な風貌のホテルが連なる光景が目に入った。

「まじかよ」

将之は子供が遊園地に来たようなわくわくした声で言った。

「もちろん避妊は怠らないでね。それと私は体を提供するから、ホテル代はそっちもちで」

「おいおい、細かいんだな。わかった。その要求のんでやるっ」
「その後はもう付きまとったりしないよね」

「いや、それは約束できない。もし想像以上に体の相性がよかったら、俺はもつと求めてしまう」

その回答にはケムヨはたじたとになり、体が怯んでしまう。安易に対策として軽い女を演じてみたが、やはり通じる相手ではなかった。

ここで初めて将之はケムヨを負かせたと思って嬉しくなった。

「さあ、それじゃ行こうか」

今度は将之が調子づいてケムヨの腕を引っ張った。

だが、ケムヨは咄嗟に抵抗する。

「ん？ どうした怖氣ついたのか」

「話が違っじゃないの。誘う女は嫌いだってそう言ったから私は……」

「だから君は特別なんだよ。そう、例外。君から誘われたら喜んでホイホイついていくよ」

ケムヨは肩をがっくりと落とした。

「はぁ…… 悔しいけど負けたわ。わかった。友達になればいいんでしょ。もうそれで勘弁してよ」

「おっ、こんなに早く敗北宣言？ なんか光栄だな。という言っことはこの先もまだ可能性があるということだ。ケムヨの弱点を知れば君は俺に従う。面白い。これは楽しいくらいだ」

将之が面白がっているとは対照的に、ケムヨは腹が立ってきてブルブルと体が震えだした。

「何が面白いよ。こっちは迷惑してるってわからないの。言ったでしょ私はゲームセンターにあるゲームじゃないの」

「恋の駆け引きというのがゲームみたいなものだから、一概に否定はできないかもな」

「どこまでも話を通じない人ね。これじゃ埒があかないから。今日はもう帰るね。さようなら」

ケムヨは疲れてしまった。相手になればなるほど将之はムキになっていく。変なものと知り合ってしまったと後悔していた。

無視することが一番の対策だと踵を返した。

「あーあ、俺をその気にさせといて置き去りか。俺も低く見られたもんだ。まあ、いつか」

ケムヨは一刻も早く将之から離れたいと、早足で歩く。

大通りに差し掛かるとタクシーを探し出した。空車のサインを出しているタクシーを見つけ手を挙げる。

タクシーが止まると同時に将之がケムヨの前に飛び出した。

「本当なら俺が家まで送ってあげたいんだけど」

「ちよつとそこをどけてよ。まさか横取りしようってんじゃないでしょうね」

「違うって。だけどちよつと待って」

将之は開いたドアから顔を突っ込み、何やら運転手と話をしてそして何かを渡した。

「一体何をしてるのよ。早くどけて」

「はいはい、今日のところはこれで引き下がるよ。あまりしつこくして嫌われても困るからね」

「もう充分しつこくて嫌ってるわよ」

将之を押しつけケムヨはタクシーに乗り込む。

「やれやれ、まあいい。とにかく連絡先教えてくれ。また連絡する」
「誰が教えるものですか。運転手さん、ドア閉めて下さい」

ドアが締まりだすと将之は後ろに仰け反っていた。

ケムヨは窓に顔を寄せ舌を出してベーと威嚇する。

そしてタクシーは川に流した葉っぱの小船が川面をすべるようにその場を去って行った。行き先などまるでわからないとも言えないように。

将之は暫くタクシーを見つめていたが、見えなくなると空を仰ぐ。

街明かりで闇は少し薄まっているように見え、夜の訪れによっていつも感じる寂しさまでもが弱まっているようだった。

将之はズボンのポケットに手をつ込み、少し前屈みに静かに歩き出す。

先ほどバカ騒ぎしてケムヨと言い争った余韻を楽しむように口元が少し微笑んでいた。

「真理絵先輩！」

鼻息が荒く吹き出る闘牛かのごとく、優香は興奮してデスクに付いていた真理絵に影を落とした。

「あら、優香、それに留美、一体二人してどうしたの？」

留美が優香の後ろで顔をしかめ目をぱちくりさせながらそれとなく原因を知らせている。

目の前の優香の興奮状態も含めて真理絵はすぐにサインを読み取り、理解した上で素知らぬ顔を決め込む。

「酷いじゃないですか。留美から聞きました、金曜日のこと。どうしてそんなことになったんですか？ 夏生さんの連絡先教えて下さい」

「ああ、あのことが。別にそんなに怒ることでも。あんたが来なかったのが悪いんじゃない」

「だから、合コンだったら無理してでも行っていました。それをただの食事会だなんて言うから……」

「優香、いい加減にそうがつつのよしなさい。みつともないわよ。私達との食事は平気で断って、合コンだったら無理してでも行っただなんて、私達に失礼だと思わないの。あなたのような人が来なくて良かったわ。夏生が恥をかくところだった。夏生の連絡先は教えら

れないわ」

はっきりといわれて優香は腹が立つと共に、暴言に近い言葉を吐き出した。

「そういう真理絵先輩だって、結局は夏生先輩のこと影では羨ましいって思ってるんでしょ？ 自分だっていい男見つけたんじゃないんですか」

あまりにも力説すぎて声を張り上げたので、周りの人たちの注目を浴びてしまった。

「優香、もういい加減にしなよ。真理絵先輩に失礼だし、皆見てるよ」

留美が止めようと優香の肩に手を置くと、優香はブルブルと震わせ涙目になっている。

「ちよつと優香、泣くことじゃないでしょ。ほんとにあんた何をそんなに躍起になってるのよ」

真理絵が呆れたとばかりに顔をしかめた。

「とにかく真理絵先輩、もう一度夏生先輩に頼んで下さい」

「嫌に決まってるでしょ。他の人にあたりなさい。これから会議があるんだから、もう邪魔しないで」

デスクの書類をかき集め、それをまとめると真理絵は席を立った。それを合図に、留美はお辞儀をして真理絵に申し訳ない態度を見せる。

そして優香の腕を引っ張って自分の部署に連れて行く。

「悔しい」

優香は下唇を噛み、わなわなとしていた。

留美もまた引いてしまうほどうんざり気味に廊下を歩いているとケムヨとすれ違ったので、その大変な様子を分かって欲しいとわざとらしい苦笑いで示してしまう。

ケムヨはつい優香の敗北した姿を見てしまったが、それが気に食わないと優香は食いかかった。

「何見てんのよ」

「いえ、別に」

ケムヨは目を逸らし下を向いた。

「もう、優香、やめてよ。ごめんなさい、ケムヨさん」

そこにスーツを決め込んでオーラを漂わせた会社の役員らしい男性達が数人歩いてきた。

会社の中のお偉いさんとあつて、すれ違う周りのものは立ち止まり大名行列を見送るように礼儀正しく礼をしている。

優香も留美も緊張して背筋を伸ばし何事もなくすれ違って欲しいと大人しく突っ立っていた。

ケムヨは態度を変えることなく暗くじっとする。

その時目に映った周りの社員達の姿をケムヨは物悲しい目で見つめていた。

権力をもったものには逆らえない、そして従わなければならない絶対的な力を見せ付けられる。

これが会社の組織と言うものだと、体全体で感じていた。

役員達がケムヨの前をすれ違ったとき、ケムヨも頭を下げた。

その中で一人ケムヨを見つめて歩くものがいた。

年は50を越えているが、白髪混じりながらも紳士らしい気品が感じられた。この会社の専務だった。

役員達が見えなくなると、従業員達がほっと息をつく。

今まで息をしないで我慢していたようだった。

「ああ、緊張した」

張り詰めた空気を逃がすように留美が言った。

「どうやったらああいう男達に近づけるんだろう」

「優香、なんでそうなるの？ あの人たち結構年いってるし、絶対妻子持ちだと思うんだけど」

「それでもいい。あの権力懂れる」

留美はどうしようもないと、匙を投げたくなった。

「ほら、いつまでもこんなことしてられないわ。私達は契約切られたらそれまでなんだから」

留美は優香を引っ張っていった。

「契約切られたらそれまでか……」

ケムヨは呟く。

そして自分の与えられた雑用の仕事に取り掛かった。
時給850円、週に2、3日顔を出すだけで仕事は難しくない。

だがケムヨは一生懸命自分の与えられた仕事以上に取り組む。
トイレ掃除は清掃係の仕事だが、時々手伝ったりもする。
なぜなら清掃係のおばちゃんたちからの面白い話を聞いたり、
そしてトイレに集まってくる女性社員たちの本音が耳に入るからである。

趣味といってしまうえば悪趣味だが、大きな会社に入って学ぶことは色々だと、ケムヨは鋭い目を光らせて隅々を見ていた。

人を観察する癖がついて、物事を常に冷静に見る。
そこに人生の非情さを見つめ、世の中は不公平が当たり前なんだ
と思うところがあった。

それでも人はもがいて少しでも良い場所を求め、時には策略が仕
掛けられる。

優香がいい例だった。いい条件の男を求めようとして分かりやす
いくらの行動力を見せ付けられた。

それは見苦しいが悪いことだとは思わない。
人間の本能であり、結局は自分が手に入れられるかそうでないか
そこへ辿り着いた結果が全てだ。

自分がこんな状況でそれなりに満足しているから冷静に見られる

だけであつて、そうじゃなければ何をしてたかわからない。自分も優香のようになっていたかもしれない。

週2、3日のパートで楽だから満足しているわけではなく、ケムヨは他にも仕事を持っていて、やるべきことをやっていたからそんなことが言えた。

ケムヨは自分でも恵まれていると思うくらいのはやっている
と納得している。

「あ、ケムヨさん、お茶入れてくれない」
誰かがケムヨを呼んでいる。

「あつ、はい、今行きます」
ケムヨはしゃきつとして自分の仕事に取り掛かった。

昼休み、留美がキヨロキヨロしながら辺りを見回し、ケムヨを見つけると小走りになって一緒に食事したいと誘いに来た。

ケムヨは近寄ってきた理由が分かるだけに苦笑いするが、おっとりとした留美の笑顔に流されて断ることも出来ずに一緒に社員食堂に向かった。

社員食堂ではモールの中にあるフードコートのように種類多くの食べ物が目に付く。親しみやすい明るい内装で清潔感があり、数多くの社員達がここで昼食を取っている。

色々なおかずを見ながら、留美は何を食べるか迷っていた。

「ケムヨさん、今日は何食べます？」

「適当にその辺のもの」

「ケムヨさんって、会社では協調性がないというのか、大人しくなるというのか、金曜日の合コンの時と全然雰囲気違いますね」

「あの時はお酒が入ってたから」

少しいい訳するように声が尻すぼみになる。

「そっか、やっぱりお酒の力なのか」

そういうと同時に留美は食べるものが決まって列に並びだした。

留美は深く考えてなかったたので、ケムヨはとりあえずはほっとする。

会社内では極力地味をモットーに暗い女を演じているため、留美の質問はケムヨには正直ドキッとさせられた。

二人はそれぞれトレイに食べたいものを乗せお金を清算すると席に着いた。

周りは社員達が今日のメニューについて話している。

「もう少しあつさりしたものが食べたい」

「おいしいちよつとしたデザートも欲しいよね」

それを聞きながらケムヨも、目の前の油物のおかずを見て同じように思ってしまった。

「ケムヨさん、それであれからどうなったんですか」

留美は箸でご飯をつまんで口に入れる。

あどけない目をしながらも、その中に好奇心が湧き出ている。

「別に、どうもしない。真っ直ぐ家に帰った」

「だけど、将之さんケムヨさんを追いかけていきましたけど、会わなかったんですか？」

「会わなかった……」

面倒臭いので嘘をついてしまった。

将之が追いかけてきて会ったことは会ったが、あの時のエピソードなど人に言えたものじゃない。

そしてその後、タクシーで無事に家まで帰れたが、あの時將之が運転手に先にお金を渡していた。

降りるときお金を払おうとしたが、運転手が「もう頂いてますんで」と言っただった。

あんな小細工して、それで自分の気を引こうとまだ思っていたのが癪でたまらない。

次会ったら「小癪な真似をしゃがって」と空手チョップでもお見舞いしたいくらい急に箸を握る手が震えた。

頬が強張って引き攣っていると留美に不思議な目で見られていたので、ケムヨは話題を変えようと話しかけた。

「それで、あの後皆で二次会のカラオケいったんでしょ。あなたたちこそどうなったの？」

「あっ、すごく楽しかったですよ。夏生先輩と旦那さんがデュエットして見せ付けられました。ほんとにお似合いで」

「夏生たちのことはいいけど、留美ちゃんと真理絵さんはどうしたのよ」

「えっ、ああ、ええと、普通に皆と喋ってただけですけど。でも義和さんと真理絵さんは結構意気投合してたかな。上手くいくといいですよ」

留美はどこまでもおっとりしていた。

「留美ちゃんは貴史っていう人とは発展なさそう？」

「はい。私そういうつもりなかったので、全然意識してませんでした」

あつさりと返されて、ケムヨは箸を持ってた手が止まった。

留美はマイペースで一緒にいて安心感がある。だけど損をしそうなタイプに思えてケムヨは少しお節介になっていた。

「でも、相手は会社の社長さんだよ。なんとも思わないの？」

「うーん、それはそれですごい人だとは思っんですけど、私の好みじゃなかったです」

「ああ、そうなの」

留美は少なくとも優香のような子ではないとケムヨは微笑んだ。そんなことを思ったものだから、噂をすればなんとやらで優香が現れた。

「ちょっと留美、私を置いて先に来るなんて酷い。なんでケムヨさんと食べてるのよ」

「私が誰と食事しようといいでしょ。優香、少しは立場をわきまえなよ。私だって離れたくなっちゃう」

「留美はいつから私に命令するようになったのよ。あつ、もしかしたら合コンで上手く行ったから上から目線じゃないの？」

これには他人事ながらケムヨは苛ついた。つい留美を庇った。

「優香さん、いい加減にした方がいいわよ。そんな態度じゃ本当に誰も寄って来なくなっちゃう。それに留美ちゃんも優香さんみたいにガツガツした人じゃない」

「ちょっと、私みたいにガツガツした人って何よ。あなたのような週三日くらいしか来ないパートに言われたくないわ。いい仕事にも就いてないでお説教できるような立場なの？」

「優香、もうやめてよ。ケムヨさんもどうか私のこと気にしないで下さい。慣れてますから」

ケムヨはそれ以上何も言わなかった。

黙りこんで黙々とご飯を食べだす。

「ほうら、みなさい。結局は自分の立場わきまえたようね。黙り込むんだったら、謝って欲しいくらいだわ」

ケムヨは食事を途中でやめ、立ち上がると優香に頭を下げた。

「失礼なことを言って申し訳ございませんでした」

「ふん」と優香は踏ん張りかえっている横で、留美はおろおろしていた。

その間にケムヨはトレイをもって潔くその場を去る。

そしてかなり離れた場所のテーブルに座り、一人黙々と食事した。

留美は優香と何か揉めていた様子だったが知ったこっちゃないと冷淡になっていた。

その時誰かが近づいて声を掛けてきたのには驚いた。

「すみません、ここ座ってもいいですか？」

ケムヨが顔を上げると、そこに爽やかな笑顔で優しく笑う男性が立っていた。

横長のテーブルがいくつも繋がり、場所が開いていれば誰もが好きに座れる。相席になったところで別に問題はない。

ケムヨはあっさりと「どうぞ」と返事した。

ケムヨから許可を貰い、その男性は向かい合わせに席についた。目の前の男性が「頂きます」と手を合わせて食事を始める姿をケムヨはついばけつと見てしまう。

目が合うと、申し訳なさそうにケムヨは視線を逸らした。

「あの、さっきのやりとり見てました。あの時謝ってましたけど、謝る必要なかったと思います」

「えっ？」

「あっ、すみません。変なこと言って。僕、この春入ったばかりの新人です。二宮タケルっていいいます。えっと、あなたは……」

もじもじとしている。

「私はナサケムヨ」

面倒臭かったが、相手が先に名乗ったので礼儀として答えていた。

「えっ？ 情け無用？」

「そう思ってくれて結構ですけど、苗字がナサ、名前がケムヨなんです」

「はぁ、そうなんですか」

タケルは何か言いたげにしながら、一応納得した表情をしていた。

「慣れてますので変に思ってくれていいですよ」

タケルはどう反応していいのか困惑して目をぱちくりしているが、最後はくったくのない笑顔を見せていた。

その笑顔はまだ学生らしい雰囲気が漂い初々しい。

あまりにもかわいいその笑顔にケムヨも釣られて一緒に笑った。

「笑顔が素敵な人なんです」

タケルに言われて、ケムヨはびくつとした。慌てて下を向きご飯をかけ込む。

その後タケルは自分の好きな映画や音楽の話題を振ってきた。ケムヨは適当に相槌を打っていたが、人懐こい犬みたいでそれを相手するように決して嫌ではなかった。

社会人になって間もないタケルは擦れた部分がなく、素直でみずみずしい。

この先どんな風にこの会社で育っていくのだろう。

ある人物に重ねてタケルがこの先変に変わっていかないか、その行く末をつい心配してしまった。

先に食べ終わったケムヨは席を立つ。

「それじゃ私はお先に。これからもお仕事頑張ってくださいね。お会

いできて光栄でした」

「あつ、ケムヨさん。また会えますか？」

「そうね、同じ会社で働いているんだし、多分ね」

名残惜しそうにしているタケルに軽く礼をしてケムヨは去ろうとするが、タケルは何か言おうかと喉まで声が出かきながらまた次があるとおっさりと諦めて同じように頭を下げていた。

ケムヨが去った後で「情け無用か……なるほど」とタケルはくすつと笑っていた。

食べたトレイを「ごちそうさまでした」とケムヨが返却口に返せば、隣に朝見た専務も同じように返しに来ていたことに気がついた。

ケムヨは咄嗟に頭を下げた。

専務の前では緊張感が走る。

当たり障りのないように静かに去ろうとすると声を掛けられた。

「ここの料理は美味しいかね」

「えっ、あつ、はいそれなりに美味しいかと。でももう少しメニューにメリハリがあればいいと思います」

「例えばどんな感じだね」

「はい、特にヘルシーなもの。ダイエットしている女性も居ることですし、またメタボと悩む男性も増えてます。少しあっさりしながらも満腹感を得やすいカロリー控えめなものがあると嬉しいですよ。そして気軽にちょこつと食べられるデザートもあれば、甘いものがストレスを紛らわして気分もよくなりそんな感じがします」

「うん、なかなかいいアイデアだ」

「いえ、滅相ありません。それでは失礼しま……」

ケムヨがいかけたとき、専務がさらりと言葉を残した。

「勝元翔が海外勤務から今度本店に戻ってくることに決まった」
「えっ？」

ケムヨが聞きなおよす暇もなく、専務はその場を去っていった。その後姿を呆然と見つめ、どんどん血の気が引いていく。

「翔が戻ってくる……」

その名前を小さく呟いたとき、心にどしんと重たいものがのしかかったように思えた。

専務の須賀^{すがゆずる}譲はこの会社でも社長の右腕に位置づけられ、絶対的な力を持っていた。

人事部を経て人を見る目を肥やし、この会社の戦力となるものを見極めては会社の運営を担う戦士を育ててきたと言ってもいい。

落ち着いた話し方が人を安心させ、それが表面にも現れて見掛けは物腰柔らかそうに見えるが、彼の皮膚の下には研ぎ澄まされた鋭い刃物が隠されているように気づかぬところでそれが刃を向くこともある。

社長も信頼するだけに仕事の腕も経営力も部下の統治もすべてに置いて優れた能力を発揮している人物であった。

そんな地位の者がしがないパートのケムヨに声を掛けてくるのは、須賀はケムヨのことを良く知っていたからだった。

決して公にできない二人の間柄は密かに隠れてやり取りが行われる。

ケムヨがパートで仕事に来る理由もそこにあるようだった。

須賀から聞いた話にケムヨの気分は暗くなる。

元々暗い風貌なので誰もその変化に気がついてないのはちょうどよかった。

だがその午後は仕事に身が入らない。

同じようなところを何度も掃除したり、ボーっとすることが多か

った。

「ちょっとケムヨさん、この在庫のチェックをしてっていったですよ。もう切れてるじゃない」

お局っぽい気の強そうな女性社員に注意を受けてしまった。

「あつ、すみません。すぐに補充します」

会社で使う事務用品。それはこまごまと色々あり、社員達の仕事にスムーズに行えるようにとケムヨはいつもチェックしていたが、ついこの日は忘れてしまい、最悪にも在庫が切れてしまっていた。

在庫を取りに倉庫室へ行くと、ドアを開けると同時に、中でいやついているカップルを見てしまいギョツとする。

カップルもドキッとしていたが、相手がパートのケムヨだと分かると開き直ってガンを飛ばすだけだった。

ケムヨは必要なものが入っている箱を手にして、さっさとその場を去ろうとする。

「俺達のこと言うなよ。言ったら首だからな」

弱い立場のケムヨに、ある程度の地位についている男性社員は強気だった。

ケムヨはぐっと堪えて部屋を出てドアを閉めた。

無性に腹が立つ。皆見えないところで自分をあざけ笑っている。自分がパートだというだけでこの扱いだ。

慣れてるつもりだったが、いざこういう場面を目の当たりで見えてしまうと、イライラして仕方がない。

それでも平常心を保ち、腹に力を込めて我慢していた。

「こんな私でも、恵まれている。残念なのはあちらの方」
そう呟いていた。

この日の仕事が終わりに、ロッカールームで持ち物と上着をとり出していると、回りも同じように一日の仕事を終えてほっとした女子社員や契約社員が好き勝手に話していた。

「知ってる？ あそこの部署の課長さん不倫してるんだって」

「あのお局さん、陰険で腹が立つ」

「なんかこの会社の副社長、会社の金使い込んでるらしいんだって。父親が社長だと息子はバカっぽいよね」

話題にはつきそうもなかった。

その時ふと聞き覚えのある名前を聞いた。

「二宮タケル君、また課長に叱られてたよね。あれじゃパワハラだ。かわいい子だけに同情しちゃう」

聞いたことのある名前。この日一緒に昼食を共にした新入社員だったと思い出した。

まだ仕事に慣れてない姿が容易に想像できる。めげずに頑張っ
て欲しいものだ。タケルの奮闘振りの話を耳にして、ケムヨは応援し

たくなつた。

「ねえ、知ってる？ 勝元さんが海外勤務から本社に戻ってくるんだって」

「えっ、その人誰？」

「あら、知らないの？ 三年前まで本社で働いていて、将来を有望された社員。しかも超ハンサム。この会社の王子様って女性社員たちの憧れの人だったのよ」

「へえ、そうなの。私が雇われる前の話なのね。その人結婚してるの？」

「どうなんだろう。当時同じ会社で付き合っている人が居るって噂は流れてたけど、もてた人だったから、いろいろと乗り換えてみたい」

「ふーん、なんか昼メロみたいな話っぱいね。だけどどんなハンサムなのか気になる」

まだその話は続いていたが、ケムヨはロッカーを閉め、そこを去った。

勝元翔が戻ってくる噂はあつと言う間に会社に広がっている。

須賀専務が前もって教えてくれたということはケムヨがあまり傷つかないようにと思つてのことだったのだろう。

なぜなら、勝元翔はケムヨの元恋人だったというのを須賀は知っていたからだつた。

多少誇張されてはいるが、ロッカールームで女子社員が話してた通り、勝元翔は当時付き合っていた恋人を捨てて他の女性に乗り換えた。

ケムヨがその振られた恋人だったから、そのことは噂で聞くまでもなく本人が一番良く知っている。

まだケムヨは世間を知らなさ過ぎた。

それでも真面目で一生懸命だけが取り得というくらい素直で明るく、若さゆえに突っ走る部分があった。

大学を卒業後、社員としてこの会社に入りＯＬをしていた。

その時勝元翔と知り合う。

翔はまだ駆け出しの新人だったが、後に奇抜なアイデアとその行動力で会社の実績を収め、上からも認められるようになっていった。

実力がある分、敵も多かったが、翔は怖いもの知らずというくらい突き進んでいた。

持ち前の大胆さとはばしる自信が立ち向かう戦士のように、会社でも国取り合戦のごとく自分の地位を固めていった。

ケムヨはそのアシストをして仕事を手伝ううちに、翔の最も理解ある立場となり二人は知らずと恋に落ちていた。

仕事に響いてはいけないと、ケムヨは内助の功を買って出るように、翔の恋人だということは内緒にしていた。

このまま行けば結婚と言うことも視野に置いていたが、翔は成功と共に力と金を手に入れると歯車が狂いだすようになった。

益々強欲に権力を求め、そしてステイタスという魔力に取り付かれていく。

更に上を目指そうと、野心ばかりが膨らんでいってしまった。

顔も充分いいと元からモテていたが、実績やその地位がプラスされるともっと女性が群がり始める。

女性だけじゃなく、その勢いにあやかりたいとチャンスを狙う男性たちもちやほやするようになった。

仕事の成績は常にトップとなれば上も何も言えなくなり、翔はそころ天狗になっていた。

それでも自分だけを見てくれているとケムヨは翔をひたすら信じていたが、浮気現場を目の前で見えてしまい、もうそれまでだと打ちのめされた。

相手は資産家の令嬢。

美貌も金も地位も備え持った人だった。

元からはつきりと付き合っているとは公にしていなかったのに、翔と別れても相手がケムヨだったとは知らず誰も同情してくれない人もいなかった。知っていても不釣合いだったと笑われるだけだったかもしれない。

だが一人、須賀だけはその状況を知っていた。

ケムヨはそれから氣力をなくし、仕事どころではなくなってしまう

う。このときから性格が暗くなってしまった。そしてすべてにおいて冷めて見る癖がついた。

唯一事情を分かっていた須賀は、落ち込んで会社を退職しようとしていたケムヨにパートという立場を提案した。

その頃翔も急遽海外勤務が決まって顔を合わすこともないので、復帰できるそのときまで気楽にしてみたらどうかと勧めてくれた。

その須賀の一言で、ケムヨは自分の立場をよく理解し、それに従って生きてみようと思い始めた。

世の中は不公平。

そのことを胸に刻み、自分の目で色々と確かめてみたいと人を観察しだしたのもこの頃からだった。

「翔が戻ってくる？　おう！　勝手に戻って来いよ」

気にしないと強がっていても、あれほどに恋をしたことはなかったことから、心の傷はうずいて仕方がない。

動揺を隠そうとケムヨは仕事帰りにコンビニで酒を買い込んだ。

「ええい、飲んでやる」

強くならなければと、ぐっと体に力を込めて酒の缶が入ったコンビニの袋を手に持ち闊歩していた。

あと少しで家に着くというときだった。
辺りが夕暮れの闇に飲まれるようにぼんやりとして夜の訪れが迫っていた。

そんな薄暗い中、後ろから突然肩を叩かれ、ケムヨは飛び上がって驚いてしまった。

振り返って二度びっくり。

「よっ、奇遇だね」

「ああ！ 将之！ なんであんたがこんなところにいるのよ」

「へへ、これも運命かな」

「ちょっと待って、何が運命よ」

ケムヨは驚きを通り過ぎて怒ってしまう。

自分がここに住んでいることは元恋人の翔と親友の夏生以外誰にも話していない。

翔は論外だし、夏生が情報を漏らすわけがないし、偶然に将之とここで会うことなんて確立で考えたらなにに等しい。

そしてはっとした。

「あんた、あの時タクシーの運転手を買収したわね」

将之が乗車賃金を前もって払ったということはこういうことだった。

ケムヨがどこに住んでいるか連絡するようにタクシー運転手にお金を渡していた。

「ご名答」

しゃーしゃーと将之は悪びれる様子もなく答える。

「しかも私が帰ってくるまで待ち伏せしてるし、ちょっとこれじゃ

スーパークーじゃない」

「いや、違うな。だって俺達友達だろ。だったら友達に会いに来て何が悪いんだ？」

「でも住んでるところを隠れて探し当ててるってのは反則じゃない」

ケムヨが怒っていても将之は素知らぬ顔だった。話を擦り変える

「あれ、一杯酒を買ってるじゃないか。もしかして俺がここに来ること予め分かっているって用意してくれてたんだ。なんだ歓迎してくれてるんじゃないか」

「ちよつとどうしていつも話がこじれるのよ。そんな訳ないでしょ」

ただでさえ、突然の招かれざる訪問客で揉めるときにさらにまた余計な頭痛の種が発生した。近所の知り合いのおじさんが寄って来たのだった。

おじさんというより、孫も何人もいるような隠居生活をしているおじいさんだった。

「おつ、お嬢、お帰り。もしかしてその人、お嬢の恋人？」

「お嬢？」

将之がその言葉を繰り返す。

ケムヨは将之をその老人から隔離するように自分が前に出た。ピョンチに陥ったように体から汗が急に噴出してくる。

つい慌てふためいて力を入れて否定した。

「いえ、ただの知り合いです！ それにしても、最近暑くなってきましたね。おじさんも体気を付けて下さいよ」

「ああ、わしは大丈夫じゃ。お嬢のじいさんはどうじゃ？　まだあ
の世界で暴れとるんだろうな。この街が落ち着いてるのもあの人の
お陰だし、まあ、じいさんに宜しく言っておいてくれよ」

「あ、はい、ありがとうございます。それじゃすみません、失礼し
ます」

ケムヨは一刻も早くこの場から去ろうと将之の背中を無意識に押
していた。

「おい、何慌ててるんだ。それにあんたのじいさん何やってんだ」
「そういうことはどうでもいいの」

気が動転して焦ってしまい、結局は将之を家の前まで連れてきて
しまった。

そして将之は突然連れてこられた場所に目を丸くした。

「えっ、なんだよこの建物は……」

将之は目の前の建物に驚き、その隣でケムヨは再び頭を抱えてい
た。

「私が住んでる…… アパートよ」

ケムヨは見られなくなかったと思っても、ここまで来ると後の祭りだった。

近代のマンションという建築物や雑居ビルがごちゃ混ぜに密集しているような街の中、明治時代に建てられたような雰囲気のある館が建っている。

そういうとレトロでお洒落っぽい響きがするが、それはおんぼろで両サイドのビルに挟まれ押しつぶされそうに場違いに汚くボロく建っている。

つぶれ荘と命名したくなるその建物は、二階建てで入り口は正面に一つ、雨をよける屋根がついたポーチの奥に大きなアーチ型のドアがついていた。その両隣に配列良く窓も並んでいる。

所々、壁に亀裂が入り薄汚れ、窓も水をかけて洗いたくなるくらい砂埃で曇っている。

枯れた植木が鉢に入って玄関先の隣に忘れられたように置かれ、全く手入れがない。

手入れしようにも手遅れくらいそれはすでに息絶えたカラカラの状態だった。

あまりにも古ぼけた建物で、お化け屋敷と呼ばれても不思議ではないみずばらしさが漂う。

「なんか古くてアンティークでばろい」

「全部同じような意味の単語並べないでよ。住んでるところわかったんだからもう帰ってよ」

「いや、ここまで来たら中はどうなってるのか見てみたい。よくこんなアパートに住めるよな」

将之は道路とアパートの隔たりを示すように設置されていた門に手をかけそれを押した。動いたとき、ギーっという錆付いた音が不快に響いた。

表庭と呼ぶには小さすぎるが玄関に行くまでスペースがあり、そこに足を一步踏み入れたとたんその後は怖気ず、建物の玄関目指して一直線に向かった。

「ちよつと、やめてよ」

嫌がるケムヨを押し切って玄関のドアを開けると、奥に続く廊下と二階に上がる階段がまず目に入る。

廊下の両サイドにドアが並んで、それが部屋になっているのがわかった。

玄関で靴を脱ぐところを見ると、一軒家のようにトイレ風呂は共同で下宿先のようにそれぞれの部屋を与えられたような感じだった。

だが将之は目を見開いて、軽く口を開けている。

年季は入っているが光沢のある立派な柱。掃除は隅々まで行き届いて清潔感がある。

廊下は赤い絨毯が敷き詰められ、吹き抜けの頭上には豪華なシャンデリアがぶら下がる。

壁には立派な額縁の油絵まで掛かってあった。

そこはお洒落なアンティークの洋館の雰囲気醸し出している。

表のおんぼろな風貌と違って、中は全く違って高級感溢れていた。

「なんだ、このアンバランスなギャップは」

その時、二階から着物を着たおばさんが降りてきた。将之の姿を見ると目を丸くして驚き、ケムヨの様子を恐々と伺っている。

「あつ、お帰りなさい」

ケムヨを見て挨拶するが、顔が笑ってないところを見るとどう話しているのか戸惑っている様子だった。

「ただいま。あの、お騒がせしてすみません。こ、この人はその」

ケムヨもどう紹介していいかわからない。

「はじめまして。篠沢将之と申します。ケムヨさんと親しくお付き合ひさせて頂いてるものです」

「ちよつと、その言い方は誤解を招くじゃないの。シズさん、違うからね、誤解しないでね。夏生と共通のただの知り合い」

ケムヨが焦って違う違うと手を目の前で強くブンブン振った。

心配させないようにとシズも知っている夏生の名前を出したが、それが余計に誤解を招いてしまった。

「まあ、夏生お嬢様のお知り合いの方でもいらっしゃるんですね。これは初めまして。胡蝶シズと申します。ここの管理人です。あなた、あなた、ちよつと」

階段越しに二階に向かって声を上げると、初老の男性が降りてき

た。胡蝶ゲンジ、シズの夫だった。

「ああ、これはお帰りなさい」

ケムヨを見るなり挨拶をする。

「あなた、こちらは夏生お嬢様のお知り合いでもある方ですって」

シズが紹介するとゲンジは丁寧に挨拶した。

「おお、それはそれは。ようこそいらっしゃいました」

「だから、そんなに丁寧にならなくてもいいんだってば」

「いや、でも、そういう訳には、シズ、すぐお茶の用意を」

「ゲンジさん、いいんです。気を遣わないで下さい。将之、仕方がない、とにかく上がって」

収集がつかなくなり、ケムヨは靴を脱いで、将之を引っ張り、一階の一番奥の自分の部屋に連れて行った。

そして部屋のドアを開け、その中に将之を押し込んだ。

ケムヨは様子を伺っているシズとゲンジの顔を気にして苦笑いになりながら部屋に入ってドアを閉めた。

「もう、なんでこうなるのよ」

ケムヨが首を垂れて困っているというのに、将之は物珍しそうにケムヨの部屋を隅々まで観察していた。

「なんだよこの部屋、結構広いじゃないか。しかも豪華ときてる。これがおんぼろアパートの中なのか。ギャップが激しすぎる」

将之が言つとおり、そこは十畳くらいの大きさがあり、ふかふかの絨毯にアンティークの家具とベッド、そして大きな光沢のある木のデスクが置かれ、その上に沢山のペンや色鉛筆がそれぞれの入れ物に入って並べられていた。

将之はデスクの前に行きじろじろと見る。

ポーズを取るためのデッサン人形、色んな形の定規などの画材道具が置かれていた。

将之は無造作に置かれていたスケッチブックを手に取りパラパラと中身を見だした。

「お前、絵を描くのか？」

「あつ、ちよつと勝手に触らないでよ」

ケムヨはスケッチブックをひったくった。

「部屋の中を見たんだからすぐに帰ってよ」

「ちよつと待ってくれ、ここへ押し込んだのはケムヨじゃないか。」

それをすぐ帰れて失礼じゃないか」

「だって、成り行きでこうなっちゃったんだもん。将之が待ち伏せしてるのが一番悪い」

ケムヨは苛ついて悶悶としているときに、将之はニコツと笑って言った。

「絵描くの上手いんだな」

「えっ？」

「駄洒落か？」

そのやり取りがあまりにも間抜けに聞こえて呆れてしまい、ケムヨの気が抜けた。ヘナヘナと床にへたり込んで座ってしまう。

持っていたコンビニの袋を思い出し、中から缶ビールを取り出し、

それを将之に開き直って差し出した。

「ほら、飲む？」

ケムヨに缶ビールを向けられて、将之は当たり前のように受け取り、床に腰を下ろした。

ケムヨも缶ビールを手にしてそしてプルトップを引く。

ヤケクソで「カンパイ」と将之の持っていた缶にぶつけてごくごく喉に流し込んだ。

このカンパイはケムヨにしたら『完敗』という文字がぴったりだった。

先日知り合ったばかりの男を自分の部屋に自ら連れ込んでしまい、ケムヨ自身訳が分からずにあまり深く考えないようにしようとしてビールを飲んでいたときだった。

「なあ、表で会ったおじいさん、ケムヨのこと『お嬢』って呼んでたよな」

将之が何気に聞くとケムヨは意表をつかれたようにゴホツとむせてしまう。

「それにあの管理人の夫婦も夏生お嬢様とか丁寧に呼んでるし、この辺りに住む人は女性をお嬢やお嬢様とか言うのか？」

「そうなんじゃないの。いちいち考えたこともなかった」

ケムヨはしらっばくれるようにそっけなく答えているが、将之には何かが引っかかっていた。

またいつもの癖でしつこくなるシステム装置が作動した。

「ふーん。だけどケムヨのじいちゃん何してんだ？ あの世界で暴れとるって言うってたよな」

あくまでもさりげなくだが、将之の目は何かを読み取ろうとキラリと光る。

「えっ？ 私の祖父のことはあんたに関係ないでしょ。なんでもいいじゃない。それにただ元気っていう意味よ」

「えっ、なんか気になるんだよな。このアパートも外と中じゃ全く違うし、そこに上品な夫婦の管理人だろ。まるで金持ちのお宅じゃないか。ここ家賃いくらだよ」

「それも関係ないでしょ。いくらでもいいじゃない。お金と宗教については人前では話さないことにしているの」

「金と宗教は人前で話さないか。それじゃ君自身のことについては話してくれるかい？」

「それは人によります。将之とは心許せるほどまだ仲良くなつてませんから」

「そうだな。これから仲良くなつてからだな。その時は俺も自分のことを話そう。俺が自分のことを何もかも話すとき、その時はケムヨをもう手放したくないときかもしれない」

将之はそう言い切るとごくつとビールを飲んだ。

「また、齒の浮くような言葉をシャーシャーとかっこつけて言ってくれるわね」

ケムヨも缶ビールを口元に寄せる。

そして一瞬、間が入ってから残りを飲み干した。

将之の言葉が少し引つかかったのだった。

自分のことを何もかも打ち明けた男はまだいない。あんなに好きだった勝元翔ですら話すことができなかった。

もし話していたらまた違った関係を築いていたのかもしれない。

ケムヨの祖父がよく言う言葉。

『本質を見極めたかったら、爪を隠す鷹になれ』

ことわざの能ある鷹は爪を隠すから由来していると分かっているが、ケムヨの祖父はとても厳しい人である。というより、怖い。

孫のケムヨに容赦なく人生というものを教える。それもダークな方面の方が多い。

こうなったのも祖父の息子、ケムヨの父親のせいだった。

父親は身勝手な人であり、好きなことをしてケムヨを困らせている。

父親の尻拭いをやらされていると思っっているところがあり、ケムヨは父を恨んでいた。

そして母親はその父親の肩を持ち、二人は遠い世界へと行ってしまった。

だから人生は不公平とまた強く思ってしまうのだが、それでも自分がそんなに不幸とはあまり実感していない。

この先ずつとこのままでそして年を取って死んでいく。
それが『自分の人生だ』とやっぱりケムヨは冷めた目で見ていた。

「ケムヨも寂しげな瞳になるときがあるんだな」
不意に将之が呟いた。

「ケムヨも何か人に言い辛いことをかかえてるんだろ。そのせいで時々暗い闇に落ちていく」

「何よそれ、将之がしつこいから困っててそうなってるんでしょうが」

「でも、俺のことそんなに嫌じゃないだろ？ 部屋にまであげてくれたんだから」

「成り行き上、そうなたただけで、それとこれとは違……」

ケムヨがいかけたとき、折りたたむように将之が話す。

「今度、俺んちも見せてやるよ。そしたらおあいこだろ」

「え、遠慮するわよ。あんたと二人つきりになつたら何されるかわからないわよ」

「えっ？ もうとつくに二人きりになつてるじゃないか」

ケムヨははつとした。そういえば将之は自分の部屋に居て二人つきりになっている。

「あっ！」

この状況がいかにおかしいか改めて気がついた。

「酔った勢いに身を任せてみる？」

将之は部屋の隅にあったベッドを指差し、含み笑いをする。

「酔ってなんかないわよ！ 手出したら大声で叫ぶからね。そしてらシズさんもゲンジさんも飛んで来るんだから」

ムキになって子供のように怒るケムヨを肴に将之は愉快に笑いながらビールを飲んでいた。

そんな気が全くないと言ったら男なので嘘になるのかもしれないが、少なくともこのとき見る将之はからかっているだけにしか見えなかった。

なんだかケムヨも最後は自虐的に笑えてきた。

将之が現れたことによつて、翔のことでイライラしてた気持ちがすっかり紛れているのは悔しいながらも認めざるを得ない。

現実を受け入れるように、ケムヨはもう一缶ビールを手にして、それを将之に突き出した。

「ほら、もつと飲め」

「サンキュー」

将之も楽しいと素直に笑顔になってビールを受け取った。

この瞬間ケムヨは将之と本当に友達になったような気がした。

暫くは気さくに二人は飲んで他愛もない話をしていた。

ケムヨはヤケクソも混じっているが、気を遣わないで話せるころは素直に将之の会話を楽しんでいるようにも見える。

将之も合コンで抱いたケムヨのあの暗いイメージと言い争った挑戦的な雰囲気が出拭かれたように、普通に会話ができるようになったことを喜んでいようだった。

しかし将之はこのときがチャンスとばかりにケムヨを見極めるように見つめる。

表で会ったおじいさんがケムヨを『お嬢』と呼び、ケムヨは将之が居たことでそのおじいさんから逃げるようにアパートの前にハプニングで将之を連れてきてしまった。

何か都合が悪いことでもなければ、そんな行動を起こさなかっただろう。

時々ビールを口元に寄せ、将之は分析するようにおさらいする。

アパートは見かけはおんぼろでつぶれそうに見えるのに、中はそれとは正反対に豪華でお洒落になっている。

なぜそのようにアンバランスなのだろう。

そこに上品な老夫婦の管理人。

アパートの管理人にしては、お茶を出すだの礼儀だの丁寧すぎる。

ケムヨの友達、夏生のこともお嬢様と呼んでいた。

身の振る舞い、話し方、まるで世話係のようだった。

次に身の回り品。

部屋の中は、ふかふかの絨毯、家具もアンティーク調で整えられてはいるが、手に入りにくそうなものだけに価値観が飛び出しゴージャスに見える。

ケムヨの服装も動きやすいパンツのスーツだが、金曜日に見たスーツも含めて身なりが小奇麗。

そしてあの時落とした腕時計。

あれはロレックスに間違いない。

どこか違和感を感じ謎めている。

色々な不思議なことが頭を巡り、知らずと将之の顔は眉毛に力が入ったように強張っていった。

「どうしたの、急に黙り込んで？」

ケムヨはそれとは対照的にすっかりリラックスして将之に接している。

将之は何かを聞き出せるかもしれないとそれとなく話題を振ってみた。

「あのさ、あの時落とした時計、壊れてなかったか？」

「えっ？ ああ、あれ？ うん大丈夫だった」

「ちよつともう一度見せてくれないか。傷でもついてたら弁償なくっちゃならないし」

「大丈夫だから」

将之はケムヨの左手を見たが、そこには別の腕時計がはめてあった。無難な普通の腕時計。

「どうして腕時計を見せたくないんだ。あれがロレックスだからか」
ケムヨは何も答えなかった。

将之の眉の幅が狭まるように訝しげになる。

些細なことがずれて普通の域から飛びぬけたような感覚。

それが不思議になり疑問へ繋がる。もう制御不可能。

次は好奇心が湧き起こり、はつきりさせたいと将之は矢を飛ばすごとく不躑に質問をぶつける。

「お前さ、なんか隠しているだろ。人に言えないようなことがある。凶星だろ」

たかがロレックスの時計。無理をすれば買えないこともない。ただの見栄はりなのか。だが何かがひっかかる。

ケムヨがどう対処していいのか困った顔をしていると、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。

二人の会話はケムヨには上手い具合に途切れ、将之には中途半端に不完全にされてしまい、ノックの音は一時停止のように流れを止めた。

ケムヨがドアを開けるとシズが立っている。

「あの、お連れの方もいらっしゃいますしお食事はいかがいたしましょう」

「大丈夫、彼、長居はしないって」

「おいっ、それってすぐ帰って催促してるぞ」

将之は突っ込む。

ケムヨは無視して、シズに小声で何かを話すとシズは黙って去っていった。

再びケムヨは将之と向かい合わせになる。

「という事で、そろそろ帰ってもらいましょう」

「なんでだよ。酒を勧めたのはそっちからだ。まだいいじゃないか」

「こっちは困るの」

「何が困るんだよ」

「もうこれ以上、私のことを詮索するのはやめてほしいの。誰にだって触れられたくない領域があるでしょ」

「気になるんだから仕方ないじゃないか。ケムヨも俺のこと気になっ
て何か知りたいと思わないのか？」

「全然」

ケムヨは大きくかぶりを振って返す。

全く相手にされていない振る舞いに将之は息をもらした。だが気を取り直して笑顔を見せ付ける。

「やっぱりケムヨは落としがいがあるってもんだ。益々楽しくなってきた」

「まだそんなこと言ってるの？ 言っただでしょ、私は……」

「ゲームじゃない。はいはい、わかってますよ」

言いたいことを遮られて先に言われるとケムヨは言葉に詰まる。

将之に一本取られたように癪に障ってしまい、腹いせに手を思いつきり伸ばし、ドアに向かって人差し指をさした。

無言で「帰れ」と催促する。

将之は腰を上げ、持っていた缶をケムヨに押し付けわざとらしく

「ごちそうさま」と顔を近づけて言うのとドアに向かった。

どこまでも苛つく憎たらしい性格。

「あんたね、それで私の気が惹けると思うの？ そんな態度だと逆効果じゃない」

「俺は自分らしさで勝負したい。このひねくれた性格も含めて俺を見せたいだけだ。無理していいところ先に見せてしまったら、あとは悪いところしか残らないじゃないか。それならば先に俺の嫌なところを見せて、後でいいところ見せた方が効果あると思わないか？」

「なんでそう理屈っぽい。でももし将之にいいところなんてなかったらどうするのよ」

「厳しいね。俺にいいところがないか。だけど『能ある鷹は爪を隠す』っていうだろ。本当に賢い奴は最後まで色々と考えているってもんさ」

突然出てきた祖父の口癖の言葉。それはケムヨの心に突き刺さっ

た。

「能ある鷹…… それって間違ってるよ」

ケムヨは俯き加減にぼそつと言った。

「えっ？ 間違ってる？」

「能ある鷹は爪を隠すって、結局は相手に本当の姿を悟られずにフリをして、いざというときに力を見せ付けるってことなんじゃないの？ 私には卑怯者のように聞こえる」

「なんでそうなるんだよ。間違ってるのはケムヨの方だ。本当に実力のあるものは滅多に自分の力をひけらかしたりせず、いざというときに力を発揮するってことだ。賢い者の例えだ。一体なんでそんな解釈をするんだ？ 能ある鷹になんか悪いことされたのか？ 上から頭つつかれたり、糞落とされたりしたとか。野生動物は怖いときがあるからな」

「また話が勝手にこじれてるじゃない。意味不明なこと言わないでよ」

将之はにやつと笑い、ドアを開けて玄関へと向かった。

その後をケムヨはついていった。

玄関で将之が靴を履き、ケムヨに向き合う。

「今日、本当はなんか嫌なことでもあったんじゃないのか」

「何よ、いきなり」

「いや、俺の独り言。俺も気を紛らわすとき酒を買い込んでしまうことがあるんだ」

「勝手に自分と重ねて決め付けないでよ」

「またそういうときがあるなら、俺付き合っぜ。今日は一緒に酒飲めて楽しかったよ。ありがとうな。それじゃまた」

素直に礼を言われると、ケムヨはそれに乗せられて『うん、またね』などといった。将之が歯を見せてニタつと笑ったことで、やられたと気がついた。

そのやり取りはこの先もこの関係が続くということを決定付けてしまった。

将之は玄関のドアを開け去っていく。

ケムヨは将之の後姿が目に見え付いたまま暫くその場で佇んでいた。

外は疾うに日が落ち夜を連れてきていた。
将之はもう一度アパートを振り返る。

玄関にぼんやりと灯りが灯っている。古い館は夜の暗さで一層みすばらしく見えるが中を見てしまうと価値のある建物に見えてくる。

なぜこんなアンバランスの作りになっているのだろうか。

管理人も食事の用意までしているような様子で、アパートらしからぬ雰囲気。

しかしアパートと言うからには他に住居人が存在するのだろうか。首を傾げ踵を返し、ゲートの門をくぐって静かに閉めるが、錆付いたギーという音に『放っておけ』と言われているように聞こえた。

その音に反応して暗闇で何かが急に動いた。
猫だった。

それをじつと見れば、向こうも同じようにタイマンはって睨み返してくる。

暫く見詰め合っていたが、それに飽きたのか将之の目の前をふてぶてしく我が物顔で横切っていった。

野良猫か飼い猫かわからなかったが、舌と上あごを使ってチツチツチという音を鳴らしてもう一度気を引いてみた。

猫はそれに反応して丸い目を見開いて振り向いた。

将之が腰を屈めて手を出すと、警戒しながらもゆっくりと近づき、鼻をひくひくさせて手の匂いを嗅いでいる。

もう指の先まで猫の顔があつた。

触れられそうだと、将之は頭を撫ぜようとすると、猫は頭を下げて将之の手を交わし後ろに下がって身を竦める。

もう一度手を差し伸べてみたが、一度無表情な冷たい眼差しを将之に向けてその後はくるりと振り向いて走って去っていった。

「逃げられたか」

猫は路地を入り込んで、この暗闇の中に溶けていった。

「少し強引過ぎるのかもな」

それは猫を触ろうとして失敗してしまったことだけを表してはいなかった。

「今度ここへ来るときは煮干でも持ってこようか」

街灯の頼りない光が夜の闇を少しだけよけるように照らしている。その薄暗い道を将之はゆっくりと歩いていく。

この時も空を見上げて星を探そうとしていた。

暗い夜が訪れるとき星を見れば夜の空に穴が無数に空いているように感じる。

完全な闇ではないんだと思いたかった。

星影が闇の中で宝石のように輝くように、寂しい心にも明かりを少し振りかけて希望を抱いてみたい。

将之はそんな気持ちをケムヨに抱いている。

最初は暇つぶしで貴史との賭けを楽しむゲームだった。

だがケムヨからどこことなく自分と同じ匂いを感じた。

心に闇を持ち、普段、人が見ないようなところまで見ている目。

直感でそれを感じたのはケムヨが将之に挑戦の目を向けたからだ

った。

——本当の私を見る覚悟はあるのか——

そんな目つきをしていた。

『恋人としては私には釣り合わない』

その言葉の意味している部分がそこなのかもしれない。

将之は久々にいい女に出会ったと思った。

「やってやろうじゃないか」

空を見上げ、何の星か分からないが、その時見えた星に強気に宣言していた。

将之の心の中に光がちりばめられていく。

それを見つめてみよう。

久々に恋に燃える自分を囃し立てているもう一人の自分がいるようだった。

自分を応援してくれる存在として——。

一人はどうしても孤独を呼び込むために将之は一人じゃないんだと強く思ったただけだった。

意識がどこかへ飛んだようにケムヨが玄関で突っ立っていると、後ろからシズが心配して声を掛けてきた。

「お嬢様、どうかなされましたか」

「いえ、なんでもありません」

「あの方とはいつからお付き合いを？」

「だから、付き合つてるとかそういうのじゃないんです。どうかおじいちゃんには何も言わないで下さい。ゲンジさんにもそう伝えていただけますか」

「それは構いませんが、それではあの篠沢将之さんという方はお嬢様のことは何も知らないということですね。顔を合わせた時どう対処していいものか判断しかねまして、あれでよかったのかわからなかったものですから」

「あれでよかったです」

「しかし、初めての出来事ですよね。ここに笑美子お嬢様が男性の方を連れてくるのは。もしかしてなんてつい期待してしまいました。お顔も中々よろしゅうございました」

「シズさん、私は顔なんかで男を判断しません」

「それはもちろんでございます。笑美子お嬢様とお付き合いされる方は全てを理解し、相当の覚悟をもって、命がけで来てもらわないと務まりませんからね」

「だから、それはもういいの。けどもしまたアイツが現れたら、くれぐれも笑美子の名前は言わないで下さいね。私はナサケムヨなんですから」

「はい、分かっております。ケムヨ様」

「だから、様もつけなくていいですから」

「は、はい。気をつけます」

ケムヨは自分の部屋に戻る。

管理人とは名ばかりでシズはケムヨの世話係だった。そしてゲンジもこのアパートと呼ばれてる屋敷のメンテナンスをしたり運転手という仕事を与えられていた。

夫婦で住み込みで雇われている。詳しく言えばケムヨの祖父が雇っている。

ケムヨは訳ありのお嬢様だった。

名前も偽名を使い、身分も隠して生活している。
なぜそこまでしなければいけないのか。

それが人に言えないケムヨの秘密だった。

ケムヨの秘密を知っているのは極一部の人間だけ。
よほどの信頼できるものにしか打ち明けられない。それはケムヨの祖父も関与している理由からだった。

翔と付き合っていたときも、ケムヨは自分のことを言えなかった。
祖父の存在が大きなもの過ぎて、なんとなく身分を明かしたくないという気持ちがあった。

そのままの自分をまず見て欲しい。

それこそ祖父の言う『本質を見極めたかったら、爪を隠す鷹になれ』を実行していた。

しかし、ケムヨは翔を心から愛してしまい、これ以上身分を偽って翔と接することを心苦しく思うようになってしまった。

そこで何もかも打ち明けようと覚悟して翔のマンションを訪れたとき、そこに見知らぬ女性がいた。

その時、翔が浮気をしていると知ってしまった。

若くして出世し、会社の社長からも期待され、社長の息が掛かった力を与えられた。将来を約束されたところで、翔はすっかり変わってしまった。

ケムヨはまたビールを飲みなおす。

缶はすでにぬるくなっており、喉越しにキレがなく、また過去の記憶が苦味を引き立たせてしまった。

翔は表からこの建物を見たことはあったが、ケムヨが誘っても中に入ろうとはしなかった。

始めて見たとき、そのボロさに驚いて中も汚いと勝手に想像していたのかもしれない。

そんなところに住んでるケムヨを見て幻滅しないようにと目を逸らしたのだろうか。それとも見切られたのか。

翔は結局のところ本当のケムヨを知ろうとしなかったのではないか。

ケムヨも自分の正体を隠して付き合うのは騙しているみたいで嫌で仕方がなかった。

かといって、正直に何もかも話していたら翔はやっぱ見る目を変えていたと何もかも終わったときにケムヨは気がついた。

人生は不公平。

自分に付きまとうものが運命を左右する。

でもこの年になればそれも悪くないとケムヨは思う。

すでにこの世がどういうものか分かっている。そしてケムヨは色んなものを排除してただそれに従って生きていく。

そうすれば傷つくことも振り回されることもない。

平坦に適当に自分に与えられたものを受け入れてケムヨは生きていける。

「それって恵まれてるからできるんじゃない」

ぐつと生ぬるいビールを喉に流し込んだ。

恵まれていると言い切ってもなんだか虚しくなってくる。

将之が飲んだビールの空き缶が何か言いたげに床に座っていた。

『ケムヨも寂しげな瞳になるときがあるんだな』

将之の言葉を思い出す。

「将之なら今の私の気持ちを理解してくれるかもしれない」

穴の中から無理やり引きずり出すほど強引で無茶なところがあるが、中々鋭い目つきを持つて物事を見ている。

そんな目で見つめて気にかけてくれていると思えば悪い気はしない。

ケムヨは窓際に立ち窓を開けて外を眺めた。

暗い夜の空に瞬く小さな星が口元を上げてニコツと笑っているように見えた。

将之の笑顔と重ねてしまふ。生意気なあの笑顔。

「今度はどんな風に近づいてくるつもり？」

期待しているわけではないが、とことん受けてやるよとケムヨは暫く、その星の光を見つめていた。

朝早く、シズに部屋のドアをノックされ「笑美子お嬢様、旦那様からお電話です」と言われたときには、ケムヨはがばつとベッドから起き上がる。

ぼさぼさの髪を掻き揚げてドアを開け、嫌々ながら受話器を受け取った。

「もしもし、おじいちゃん？　こんな朝早くから何？　えつ。来賓の相手？　そんな急に言われても。わかったわよ。行けばいいんでしょ、行けば」

ため息を交えながら電話をシズに渡す。

「事情はお伺いしております。シズがお支度のお手伝いさせていただきます」

「おじいちゃんの気まぐれと強引さに振り回されるのは嫌なのに、すぐに『立場わかってるのか』って脅すんだから……」

不満げにケムヨが呟く。

「仕方がございません。三代目跡取なんですから」

「私は継ぎたくない。お陰で普通の人生歩めない」

「さあ、ぶつぶつ言わずに早く朝ごはん済ませて下さいませ」

優しい笑顔を浮かべても、シズの瞳が鋭くきらりと光っていた。ケムヨは嫌な予感がした。

「えっ、振袖を着るの？　この年でちょっとそれはアレなんでは……」

朝食を食べた後、待つてましたと言わんばかりの得意げな顔でシズは振袖をケムヨの前に差し出した。

「大丈夫でございます。お嬢様はもちろんまだ若く、未婚の女性なら振袖はオツケーですし、着てしまえばこっちのものです」

「やだ、シズさん、なんか強引」

シズの目つきが変わった。

責任感と使命が混ざりこんだ職人の目になっている。

ケムヨはそれに圧倒されて、口を噤み全てをシズに任せてしまった。

落ち着いた藤色に美しい花の飾りが高級感を醸し出している振袖はキリリと引き締まる気品があった。

それに合うように髪型も変えられてしまった。

「ほら、お嬢様、お綺麗でございます。これなら相手側もお気に召されるかと」

「えっ？ どういうこと」

「いえ、身だしなみがきっちりとして来賓客に失礼がないということですよ」

シズはケムヨが知らぬ何かを知っている。

だが問い質しても口を簡単に割らないと分かっていたのでケムヨは黙っていた。

祖父には逆らえないとゲンジが運転する車で指定の場所へと出向いた。

着いた先は有名ホテルの正面玄関だった。

事情を知っている制服を着たボーイがケムヨの乗った車に近づき、ドアを開けた。

ボーイの着ている制服は白地をベースに立て襟や袖口には鮮やかな水色のラインが入り、正面は金色のボタンがV字のように並べられている。白いパンツにもアクセントの色と同じ水色のラインがサイドにまっすぐ入っていた。

背筋が伸び定規で線を引いたくらいに真っ直ぐ立っている。ケムヨが車から出てくると精錬された笑顔に向けて斜め45度で丁寧なお辞儀をした。

「笑美子様でいらっしますね。お待ちしております」

ホテルマンの正装がなんかのコスプレを見ているようだった。

仕事でこういう服を着られるのは楽しいだろうなとケムヨは暫くじつと見てしまう。

「あの、何かおかしいことでもございますでしょうか？」

ボーイが心配そうな顔をして伺ってきたので、ケムヨはつい本音で答えた。

「いえ、私、制服萌えでして……」

「はっ？」

ケムヨは余所行きの笑顔でとにかく誤魔化す。

ボーイはビジネス精神で深く追求せずに自分の仕事だけをこなし、ケムヨをホテルの広間へと案内する。

祖父からは来賓の相手をするだけしか聞いてなかったが、一体何がそこで催されているのかケムヨは分からなかった。

「今日は何のイベントがあるんですか？」

「政界パーティーで世間で言われる大物の方々が集まってこられます」

「えっ、なんでそんなところに私が来なければいけないのよ」

つい口から出てしまったが、見ず知らずの人に愚痴を言っても仕

方がない。

ケムヨは口元を押さえ、息を整えてにこりと笑顔を作る。

しかし、はつきりと内容を知らせなかったケムヨの祖父が何か企んでいるに違いないと懐疑心が湧き上がり、腹が立つと同時にどんな顔が引き攣っていった。

ボーイはコロコロと表情が極端に変わるケムヨを見てクスツと笑っていた。

ボーイが会場のドアを開け最後に一言ささやく。

「笑美子様のおじい様からのご伝言で『失礼のないように』とのことでした。でも笑美子様は全く大丈夫でございます。それではお楽しみ下さいませ」

ボーイはにこやかに笑顔をケムヨに向けていた。

ケムヨは一步部屋の中に入った。中ではテレビで見たような顔も見受けられる。

そこにシャンペングラスをトレイに載せたスタッフが現れ、ケムヨの目の前に差し出す。

それを一つとり、景気付けに一気にぐつと飲み干して、空のグラスをすぐにトレイに戻した。そんな意気込みがなければやってられない。

「いい飲みっぷりですね」

突然後ろから声を掛けられケムヨはドキツとした。

振り向くと、見たことのある顔がそこにある。

「あー！ あなたは二宮君」

「やっぱりケムヨさんだ。またお会いできて光栄です」

先日社員食堂で一緒に席を共にした二宮タケルが、甘えた子犬のように屈託のない笑顔を向けている。

「ちょっと、あなたここで何してるの？」

「ケムヨさんもどうしてここに？」

「わ、私はその…… アルバイトで、コンパニオン」

「それで振袖着てこのパーティに華を添えられてるんですか」

タケルはくすつと笑っていた。

「そっちは何してるの？ 仕事はどうしたの？」

「僕ですか？ 今日は休みを取って、父のお供をさせられてるんです」

「お父さんのお供？」

「はい、あそこに父が居ます」

指を指されたその先にはケムヨも知っている顔があった。二宮登、有名な何度も当選している政治家だった。

「あなたのお父さん、超有名人じゃない。しかも権力持った」

「ケムヨさんもその点では同じじゃないですか。ケムヨさんのおじいさんも……」

「ちょ、ちょっと待って、あなた一体」

「嘘をつかなくてもいいですよ。僕はケムヨさんの正体知ってますから。うちの父もケムヨさんのおじいさんと面識ありますし、事情は大体分かってます」

「あなた知っててあの時私に近づいたの？」

「はい。僕もケムヨさんを見習いたいんです。あの時も、全然悪くないのに、潔い行動をされて惚れ惚れしました。ケムヨさんの正体を知ったら震え上がるだろうに、それを隠してじつと我慢する。もうかつこいいです。姐御と呼ばせてもらってもいいですか」

タケルは憧れの眼差しを向けている。

「ちょっと待ってよ」

「大丈夫です。姐御の正体は誰にもいいません。僕も姐御から色々

と学びたいです」

「二宮君！」

「タケルと呼んで下さい」

真面目な瞳で見つめられてケムヨは困り果ててしまう。好きにすればいいと、最後はあきれてしまったが、自分の正体を知られてい
る以上邪険にもできなかった。

「わかったわ、タケル」

二人でお祝いするかのごとくシャンペーングラスを手に取り乾杯
する。

自分のことをわかった上で慕ってくれる友達がいると思うとケム
ヨは少し楽になった。

そして気楽にそのパーティを楽しもうと心構えたとき、もう一人
とんでもない奴が同じ会場に居た。

「ゲッ、なんであいつがここに居るのよ」

「姐御、どうかされたんですか？」

俯き加減に、顔を手で覆いながら、タケルの後ろに身を隠す。

「いえ、その、ちょっと都合の悪いことが……」

舞台正面でスタッフらしき人たちに指示を出して歩き回っている男がいる。

将之だった。

ケムヨはタケルを盾にあちこち連れて歩き、将之を避ける。

将之はうるちよろして、ケムヨのいる場所に何度も近づきそうになっていた。

「姐御、大丈夫ですか。あの男を避けているようですが、なんかあるんですか。あの人、このパーティを企画しているイベントスタッフですよ」

「へっ？」

「今回僕の父がイベント会社で運営を任せたんです」

「あいつそという仕事してるの？ もう早く言ってよ。うそ、こっち見てるじゃない。うわあ、こっち来ちゃうし、きゃー逃げ遅れた」

ケムヨは咄嗟に背中を向けた。そのまま過ぎ去ってくれることを願っていたが、運悪くタケルの目の前に将之がやってきた。

「君は二宮先生の息子さんでしたね。この度は私どもの会社を選んで下さってありがとうございます」

声が耳に入れば、将之はビジネスマンらしく装っている。かしこまったその声にこの上ない危機感を感じてケムヨの心臓が早鐘を打

っ。

タケルは適当に相手しているが、その後ろで不自然に背中を向けて固まって立っているケムヨの存在が将之の目についた。

そのまま放って欲しいのに、将之は礼儀だと思って声を掛けてくる。

「そちらの方は、お連れさんですか？」

「あつ、はい」

タケルも事情を飲み込んで、ケムヨを庇うように身を将之の前に乗り出し気にしながら答えている。

髪をアップにしてうなじが目立つその後姿はそれとなく興味を注がれ、将之は顔を見てみたいと思った。

少し角度を変えて回り込んでみようとするが、同じ調子で動かれて避けられてしまい気分がすっきりしない。

「ちょっと人見知りが激しくて」

タケルが取り繕うが、将之は納得できなくて気持ち収まらない。そこで背広のポケットから名刺を取り出してタケルとケムヨにそれぞれ渡そうとした。

「もしまた何かご用命がございましたらご連絡下さい」

タケルに一つ渡し、もう一つをケムヨに差し出す。

「あの、そちらの方も是非お受け取り下さい」

指名までされたら逃げられないとケムヨは不自然に俯いたまま振り返り、それを手にした。

「どうも」

小さな作り声を出す、その後をどうしていいかわからない。

まだ目の前に将之の足が見える。将之はその場を去ろうとしそうにもなかった。

（早くどこか行け）

ケムヨが心の中で叫んだ。

しかしその望は叶わず、将之はわざとらしく名刺ケースを落としてそれを拾おうと屈み出し、その拍子にケムヨの顔を見ようと試みる。

（こいつ、どこまで諦め悪くてしつこいんじゃない）

それよりもここに自分がいることがばれてしまう。

将之が覗き込もうとしたとき、ケムヨは顔を上げ、横向き加減で口を手で覆い咳き込んだ。

「どうも失礼。少し風邪気味なもので。ちょっと失礼します。ごほんごほん」

適当に理由をつけ、将之が顔を上げきる前にその場を去った。

上手く交わしたと思ったのも束の間、離れても将之はチラチラと気になってケムヨを目で追っている。

タケルは将之が後を追いかけていかなないように機転を利かせて話をしだした。

タケルが気を逸らしてくれても一時的な応急措置にしかならず、ここに居ればいつかは顔を合わせてしまいかねない。

ケムヨは出口に向かい早々ながらパーティを去ることにした。

念のため、退場する前にドアに手をかけ後ろを振り返る。

だが予想もつかないことが起こった。

将之も出口めがけてそれとなく追いかけて来ていた。

「あの男のしつこさは病気が」

もう自然に振舞うことすらできず、ケムヨは露骨に逃げた。振袖を着ているというのに、おしとやかさなど吹っ飛んで、振袖

を派手に揺らし、大股で動く。

部屋の外に出て廊下を左右キョロキョロと見渡して勘を頼りに着物の裾を持ち上げて走った。

そして将之もドアを開けて外に出てきた。

その時ケムヨが突き当たりの角を曲がった様子が目に入る。藤色の振袖が角でひらりと舞った。

迷わずそこを目指した。

ケムヨが角を曲がったとき、偶然そこに居合わせたボーイに勢いよく突っ込んでぶつかってしまった。

「あつ、笑美子様、どうなされましたか」

それはケムヨをパーティ会場まで案内して来たボーイだった。

ケムヨは気が動転し、追いかけて切羽詰った感情がパニックを引き起こす。

将之がもうすぐそこまで来ている。

前方を見れば行き止まりだった。これでは追いかけてこられるともう隠れようがない。

ケムヨはうつろたえ、涙が溜まった瞳を向けてそのボーイにすがった。

「すみません。助けて下さい」

涙目で訴えられてボーイは何かを悟り、そして関係者以外立ち入り禁止の部屋へとケムヨをすばやく押し込んだ。

「なんであの女俺をあそこまで避けて逃げるんだ」

その理由が知りたいだけで将之はついいつもの悪い癖が出て原因を突き止めようと意地になっていた。

なんとなくだが、どこかで会った気もしてそれがある人物を想起させる。

そのせいもあってか、ここまでされたら顔を見ないと気がすまないようになっていた。

そして角を曲がると立ち止まり、目の前の行き止まりに驚いた。振袖を着た女も消えている。

「どうなっただ。どこかの部屋に入って隠れたのか？」

ドアを一つ一つ勝手に開けて確かめる訳にも行かず、とにかく出てくるのではと様子を見ていた。

その時、一室からボーイが使用済みのタオルやシーツを入れる清掃カートを押しながら出てきたので、将之はじっとその様子を見ていた。

ボーイは将之に礼をしてすれ違おうとしたとき、将之は咄嗟に呼び止めた。

「すみません、ここに青っぱい振袖を着た女性が来ませんでしたか？」

「いえ、気がつきませんでした」

ボーイは表情を変えることなく、お客様に誠意を尽くすように応対する。

プロフェッショナルで全く隙のない身のこなしは却ってわざとらしく見え、将之はどことなく清掃カートの中が怪しいと訝しげに見つめる。

人間が一人、沢山の布に紛れてその中に隠れられそうな大きさだった。

そう思うと自然と言葉を発していた。

「その中には何が入っているのでしょうか」

「えっ、使用済みのテーブルクロスですが」

「ちょっと見せてもらってもいいですか？」

「はいどうぞ」

その時、頭に三角巾を被り、大きなマスクをした清掃係のメイドが三名部屋から出てきた。そのうちの一人が清掃道具を積み込んだ

カートを押していた。チラリと将之に視線を向ける。

そして何食わぬ顔でメイドたちは将之の後ろをすれ違った。

将之は一度そちらを見ようとしたが、ボーイが「少し急いでいるのですが」と言ったので慌ててテールクロスが入っているカートの中を調べる。だが何も怪しいものなど見当たらなかった。

「どうもご迷惑お掛けしました」

丁寧に将之が挨拶をすると、ボーイも清掃係のメイドの後をつけるように去って行った。

そして従業員専用のエレベーターに乗り込み行ってしまった。

将之は腑に落ちないと暫くそこで振袖の女が現れるのを待っていた。

まさかその振袖を脱いで違う服を着て堂々と将之の側をすり抜けていったとはこの時考えられなかった。

エレベーターの中でケムヨがマスクを外し、ほっと息を吐いた。

ケムヨはメイドの服を借りて難を逃れていた。

「大変助かりました。本当にありがとうございました」

皆に礼を言くと、ボーイはにこやかに笑い、スリリングだったと感想を述べた。

「なんとか誤魔化せましたね。足元見たら一人だけ素足でスリッパだったから、ヒヤヒヤしましたよ」

「さすがに足袋を履いて草履というわけには行きませんでしたから、これの方がましかと思ひまして」

「あの方は私のカートに気を取られてそちらまで詳しく見てなかつ

たみたいですね。しかし、なんで追われてたんですか？」

「私も分かりません。あの人にかくしつこい性格なんです」

「お知り合いなんですか？」

「まあ、そうなんですけど、何せ自分のこと何も言っていないもんで、ここで顔を合わせると都合が悪かったんです」

「なるほどわかりました」

事情を察したと物分り良くボーイは笑顔で対応した。

カート二台に数人が乗り込むエレベーターは地下まで降りていく。清掃カートから振袖を詰め込んだ袋を取り出してケムヨに手渡し、その後メイドたちは笑顔を向けてそれぞれの持ち場へと散らばっていった。

ケムヨはその後ろで何度も頭を下げてお礼を言っていた。

「ボーイさん、本当にありがとうございました。この服は少しお借りして、また返しに参ります。あの、もしよろしければお名前伺ってもいいですか。このご恩もお返ししたいですし」

「いえ、お気になさらないで下さい。名乗るようなものではございません。でもまたいつかお会いできると嬉しいです。また当ホテルをご利用下さいね。これからご帰員にと幸造様にもお伝え下さい」
幸造とはケムヨの祖父のことだった。

あの制服で礼儀正しい姿勢を見せられるとケムヨは弱かった。

やはりうつとりと見とれていた。

ボーイも最後はケムヨの制服好きを理解して楽しそうに笑っていた。

その後ケムヨはメイド服を着たままタクシーで家に帰ったが、こ
うなったのも将之のせいだと腹の虫が治まらない。

後部座席でふんぞり返って座っていた。

「あいつとかかわると碌な事がない」

ケムヨは将之の名刺を手にとって睨むように眺めていた。

一方で将之は暫くその場で振袖の女が出てくるのを待っていたが、仕事をすっぱかすことも出来ずに諦めて持ち場に戻っていく。

あの振袖の女が露骨に逃げたのは自分が失礼な態度を取って怖がらせたのかもしれないと反省しつつ、なぜ自分もそこまで自棄になつて追いかけてしまったのか、考えたらバカバカしくなってしまうた。

だが、ムキになつてしまったのは雰囲気がケムヨっぽいところか感じる場所があり、それで引き寄せられたのかもしれないとその行動の発端を自分なりに分析する。

「だけどもさか本人ってことないよな」

半信半疑になりながら、首を傾げてパーティ会場に入っていた。

ケムヨがメイド服で家に戻ると、玄関先で出迎えたシズは驚き目を見開いた。

「お嬢様、なぜそのような格好に？」

「話せば長くなるんです」

と言いつつも、全く話したくなかったので下向き加減に目を逸らす。

シズはそれを読み取り、話題を変えた。

「だけど、パーティは大丈夫でしたか？」

「途中で抜けてきたから、おじいちゃんの役割をちゃんと果たせなかったかもしれない。やっぱり怒られるかな。どうしよう、シズさん」

「旦那様はお怒りにはならないでしょうが、相手の方はどう思いませんか、それが心配でございます」

「えっ？ 相手の方？ どういうことですか？」

「パーティには笑美子お嬢様とお見合いなされる方がいらっしゃるとかで、それで今日は前もって顔合わせのつもりで旦那様がお嬢様をパーティに出向かせたのでございます」

「ちよっと待って下さい。なんでそんな話になってるんですか。だけれど相手って一体誰？」

「お会いになられませんでしたか？ 向こうはご存知だったんですが」

「出会ったのは政界の息子の二宮タケルだったけど…… まさかあの年下が私の見合い候補？」

「私もどなたか詳しくは存じませんが、かなりいいところの御曹司とは伺っております」

ケムヨは祖父のたくらみにうんざりしてしまう。

文句の一つでもいいかったが、あの人に刃向かえる訳がない。

「おじいちゃん怖いもんな」

ぶつくさいいながら自分の部屋に籠ってしまった。

次の日、パートの仕事で会社に出勤し、昼休みになればタケルを探しに社員食堂へ向かった。

途中、社員食堂に向かつて廊下を歩いているタケルを見つけ、後ろから手を取り人のいない会議室を見つけてそこへ連れ込む。

「姐御、どうしたんですか？」

「ちよつと昨日のことなんだけど」

「ああ、アレですね。あの後大丈夫でしたか？ あの人見事に姐御を追いかけていきましたね。僕も何か質問されても困るので避けてあの後には全く言葉を交わしませんでした」

「そうじゃなくて、そのなんかうちの祖父から聞いてない？」

「えっ？ 別に何も聞いてませんけど。なんなんですか？」

「何も聞いてないの？ お見合いのことは知らないの？」

「何ですか、お見合いって？ 僕まだ22歳ですけど、この年でお見合いは早いかと。その前に恋愛したいですし、姐御誰かい人いいませんか？」

「えっ、そ、そうだね。また居たら紹介してあげる……」

ケムヨは一先ずほつとして、何も考えずに適当なことを言った。やはりあのパーティでは途中で退場したために会えずじまいだったのかもしれない。

それにしてもあんな場所に見合い相手がいたなんて。

祖父のたくらみにケムヨは辟易してしまった。

「姐御、なんだかお疲れのようですね。僕でよかつたら相談に乗ります。公には言えませんが、姐御のおじいさんには僕も父もお世話になってますし」

「二宮君も裏で糸引いてそうね。うちの祖父と本格的に付き合うとあと大変よ。あの人は計算高く動くから義理とかいろいろそれとなく求めてくるわよ」

それは心得ているとタケルは誤魔化したような笑顔を見せていた。

二人はまた昼食と一緒に取ろうと社員食堂に向かった。

「そう言えば、前回ここできつそうな女性に何か言われてましたけど、もう大丈夫ですか？」

何を食べようかと並べられた色々なおかずを見ているときにタケルが話しかけてきた。

「何か言われてももう慣れてるから大丈夫」

「そうですか。詳しく分かりませんが、女性って怖いですね。あつ、そのケムヨさんが怖いっていうんじゃないですよ」

タケルは慌てて訂正する。動揺して食べたいとも思わなかったのに手前にあつた小鉢を一つ取っていた。

「そうよね、ほんと怖いよね。だけどそれって女だからって拘ることもないわ。切羽詰ったときは男女関係なく人間の本能が出てしまう。特に自分が得られないものを持つてる人を目の前にして、悔しさと嫉妬が混じったときに人間という生き物は怖くなるものよ」

ケムヨは独り言を言うように呟き、そして適当に目の前にあったものをトレイに乗せてさっさとレジに向かった。

タケルは置いてけ堀を食らいたくないかと慌ててその後について行った。

テーブルについて二人で食べ始めたとき、タケルの背後から女性

が現れ「ご一緒してもいいですかと」声をかけた。

タケルは面識があつたのか、小さく声を漏らしたように「あつ」と驚いていた。

その女性はタケルと同じ部署の派遣で働いている井村多恵子だった。

目を大きく見せようと睫毛が上向きにカールしてそこにアイラッシュがたつぷりと塗られている。

タイプとしては優香のような派手さがあり気が強そうだが、髪の毛先が柔らかなにはなたセミロングの明るめの髪がふわつとして、幼いかわいらしさがあるので小悪魔的タイプに見えた。

思い切ったことをしでかしそうで、でもそこに悪気がない無知な部分が見える。まだ世間のことを知らなさ過ぎてツンとした粹がってる部分があるが、経験を積みめ丸くなっていくかもしれないし、または擦れていくのかもしれない。まだ何にも染まっていないうちにも転びそうな少しかみ所のないような女性だとケムヨは一瞬で読み取った。

最後に細身だが胸がでかいとふと思ったのは、ケムヨが自分の胸にコンプレックスを抱いてつい見てしまったからだだった。

多恵子も優香同様に男性を探して、タケルを狙っているような匂いがプンプンと立ち込める。

ケムヨは冷静に多恵子の様子を見ていた。

席が空いているので断るのも不自然だと、タケルは一度ケムヨに気を遣う態度で目を合わせ、ケムヨが気にしてなかったのでもうと手を差し伸べる。

トレイをテーブルに置き、嬉しそうに多恵子は椅子を引いて腰掛けるその一瞬、向かいに座っていたケムヨをきつい目で睨んで、す

ぐに視線を逸らした。

ケムヨは気がついたが、相手にするのも面倒臭いと黙々と食事をする。

「二宮さん、この方は？」

早速自分の知りたいことを探ろうと多恵子はケムヨのことを聞いてきた。

「ああ、こちらは……」

タケルがいいかけると、その上に被さるようにケムヨは自ら自己紹介をする。

「ナサケムヨ。28歳、週に二、三回来るだけのパートのおばちゃん」

そしてまた食事を続ける。タケルも多恵子も愛想のないケムヨに一瞬哑然としていた。

「姐御、パートだったんですか？」

「そうよ、今は適当に働いてるだけ」

それを聞いて多恵子は勝ったと少し口元を上向きにする。

「私は井村多恵子です。派遣ですが二宮さんと同じ部署で働いてます。ちなみに年は21歳です」

勝ち誇った笑顔で最後の年の所を強調していた。

興味がないとひたすらケムヨは無視をして食べていた。

その瞬間から多恵子も自分のライバルではないとケムヨを気にせずタケルに話しかける。

課長が短気で気分次第で怒ることや、同じ部署の社員から無理な注文を受けて辛いと愚痴を言い出した。

そこにはタケルもいつも上司から注意を受けていることや、同じ境遇だから仲間意識を持ちたいという気持ちがあったからだった。

タケルは優しい性格なのか適当に返事して相手しているが、ケムヨの目から見ると多恵子には目も暮れていないことは分かっていた。

自分と同じだ。

タケルの状況と自分を重ね合わせると不意に口角が上を向く。

「ごちそうさまでした。それじゃお先に」

ケムヨはすくつと立ってさっさと去る。

「あつ、姐御！」

タケルは何か言いたげだったが、ケムヨは振り返らずにそのまま社員食堂を後にした。

「あの人、名前も変わってるけど、なんか暗い感じで、雰囲気悪いですね」

多恵子はケムヨが居なくなると早速話題にした。

「あのさ、人のこと見た目で判断すると後が怖いよ。それにさ……」
タケルは影で人のことを悪く言うのはよくないと言いかけたが、言ったところで自分には知ったことではないと思うと途中でやめてしまった。

ケムヨがどういう人物かは自分が良く知っている。
知らないという事の恐ろしさが、却ってこの場合面白く思えてしまふ。

つい嫌味っぽく嘲笑う笑みで唇がムズムズした。

「えっ？　なんですか？」

「いや、なんでもない。こっちのこと」

これ以上の話は無意味だと、タケルは残りのご飯をかつ食らう。
多恵子はタケルと急に親しくなれたと少し調子付いて、ぐっと腹に力を込めるように覚悟して大胆な行動に出た。

「二宮さん、今日仕事が終わったら一緒に飲みに行きませんか？」

もちろん女という最大の武器を利用するかのように甘えた態度を見せる。

自分の容姿はそんなに悪くないと思っているからできることだった。

「飲みに行くか……　そう言えば最近そういうことしてなかったな」

「じゃあ、いいんですね」

多恵子はあっさりと自分の思うままに事が運んでいくと喜んだが、タケルはすくつと席を立ち冷静に一言発した。

「いや、遠慮しとく。それに僕にこれ以上付きまとわなくてくれるかい？ 迷惑なんだ」

「えっ？」

茫然自失となる多恵子を置き去りに、トレイを持ってタケルは去っていった。

その態度は冷たく、普段見るタケルの人柄から全く豹変していた。プライドを傷つけられたとばかりに多恵子は目を潤わせて悔しい気持ちを噛み締めるように歯を食いしばっていた。

その日、仕事が終わリケムヨが会社の正面玄関を出ようとガラスのドアに手をかけたとき、後ろから「姐御！」と大きな声が辺りに響き渡たり、劈くように耳に届いた。

ケムヨは恥ずかしさのあまり振り向きもせずさっさと外に出てしまう。

「ちょっと、姐御、待って下さいよ」

タケルは必死に追いかけていた。

同じ頃、そこに多恵子も遅れて現れ、その様子を見てしまう。

タケルが『姐御』と呼んで追いかけるほど慕う態度に、益々納得できないと睥睨していた。

「姐御、なんで無視するんですか」

ケムヨの腕を取り、タケルは引き止める。

「あんだね、大きな声で『姐御』はないでしょ。あそこはまだ会社の中よ。私に変な人だと思われたらどうするの」

「えっ？ 姐御ってなんかずれてますね。もうとっくに皆さん変な人だと思ってると思うんですけど。その名前も含めて」

「あつ、そう言えばそうだった」

ケムヨも矛盾に気がついて素で真面目に納得していた。

タケルはそれが面白く愉快に笑い出す。

タケルにあどけなく笑われると憎めない。

ケムヨも釣られて一緒に笑いだした。

「だけど、普通そこは怒るところですよ、姐御」

「ところで、一体何の用？」

「良かつたら、ちよつと飲みに行きませんか？」

「誘う人間違ってるんじゃないの？」

「いいえ、僕は姐御と一緒に飲みたいんです」

タケルは屈託のない笑顔で可愛く甘えてくる。

また姐御、姐御と呼ばれているとなんだか子分を持ったみたいでケムヨはかわいがりたくなる気分が湧いてくるから不思議だった。

これがタケルの戦略だとしたら、この男も中々の兵である。

「じゃあ、少しだけよ」

お酒と一緒に飲むぐらいいいだろうとケムヨも軽く返事をした。

そして会社のビルを後にして、賑やかな飲食店街へと足を向ける。その様子を多恵子は身を隠せるような場所でそつと覗き見していた。

タケルは少しかっこつけたくて、いい店を知っていると年下ながらもケムヨをリードする。

タケルに案内されたところは有名人もたまに利用するお洒落な高級バーだった。

ケムヨはこの店に入ったのは初めてだったが、この辺りの土地はどういうところか知っていた。

まだ早い時間なので客もまばらだが、お陰でゆったりとした空間が流れているように見えた。

「いいお店を知ってるのね」

ケムヨが素直に気に入ったとばかりに微笑むと、タケルもニコツと笑みを浮かべる。

タケルはその店ではVIP扱いばかりに、低姿勢でもてなしを受けていた。

政治家の息子というだけでそれを知ってるものはヘコヘコしている。

仕方のないことだとケムヨはじっと受け入れ側の対応を見ていた。普段なら寂しい目をしているところだが、タケルがそれをなんともないと自然に振舞っていたことで少しは気が紛れた。

権力を見せ付けてそれを大いに見せびらかし威張る奴がケムヨは嫌いだった。

そしてそれに露骨にひれ伏す側の人間もあまり見たくない。

タケルは馴染みのバーテンダーの耳元に近寄り、小声でケムヨのことを紹介すると、ケムヨにも同じような扱いを施してくる。

ケムヨはまたその様子を一部始終冷静に見つめ、そしてケムヨ自身深く礼をして不公平にならないようにと一般人のフリをしていた。

照明が落とされた柔らかな光の中、艶を持ったお酒の瓶がずらつと棚に置かれている光景が見えるカウンター席に二人は座り、それぞれ好きなものを注文した。

「姐御は結構飲める方ですか？」

「まあね。お酒は嫌いではないわ」

「じゃあ、今日は姉弟の杯を交わすということで」

「ちよつと、なんでそんな言い方になるのよ」

「いや、だって姐御だし」

「もう、いい加減にしなさい」

「でも、僕、姐御の子分に喜んでなりますよ。そしたら僕にも都合がいい」

ケムヨは考えるようにどこに焦点を合わせることなくぼんやりとしていると、二人の目の前に静かにカクテルグラスが置かれた。

目の前のグラスが視界に入ったとたんフォーカスされると、タケルに視線を合わすことなくゆっくりと質問する。

「やつぱりあなたも権力を気にする人？」

「はい、もちろん。そういう力はあつた方が断然いい。でも、誤解しないで下さい。僕はあくまでもそれは楽しいからです。そして僕は姐御から色々と学びたい」

「私から学ぶことなんて何もないわ」

「いえ、確かに幸造さんは僕にそうアドバイスして下さいました」

「やつぱりおじいちゃんが絡んでいるのか。道理で私と出会ったってことね」

「はい。でも僕の父もいい機会だからこの場合はお言葉に甘えてし

「つかり学べって、背中押してくれましたけどね」

「偉いことになっても知らないわよ」

「それは醍醐味の一つかもしれないので大いに大歓迎です」

「そう。タケルもやっぱり変わってる」

「さあ、とにかくまずは乾杯しましょうか」

二人は静かにグラスを重ねた。

タケルは年下だが、思ったよりしつかりしていた。

将来はやはり父親の後を継いで政治家をめざしているのだろうか。先のことを考えて計算高く動くような気がした。

そして何より自分の正体を知った上で堂々とそのままで挑んでくる。

そこには媚などなく、無邪気さの方が勝っていた。

ケムヨはタケルが気に入った。

姐御と呼ばれるのなら、弟のように可愛がってやりたくなる。

それが彼の戦術だったとしても、タケルを見る限り裏の部分というのは見えてこない。

タケルには人に可愛がられるという才能が自然と肌についているようだった。

「ところで、お昼にやってきたあの女の子だけど」

「ああ、井村多恵子さんですか。同じ部署ですが、特別に僕とは親しくありません」

「でも、あの子どこかタケルに気があるみたいだったわよ」

「姐御もやっぱりそう思いますか？ でも僕、付きまとうんってのはつきりいつてやりました。僕の趣味じゃありませんから」

「結構はつきりしてるのね。ちらっとしか会ってないけど、あの子は少しやっかいな感じがする。ああいうタイプは一人で大げさにしそうなところがある。まだ若くて世間を知らなさ過ぎるところがあ

るだけに、自分のことしか考えられないと思うわ」

「さすが、姐御。一瞬でそこまで見抜いているんですね」

「私が側に居たからあの子はタケルに近づいたんだと思う。きつと前日も一緒にご飯食べてるところ見ていたんでしょね。それで心配になって私がどういう女か探りに来たような気がしたの」

「かもしれませんね。時々挨拶程度の言葉を交わしただけでしたが、僕が他の女の子と話しているといつも視線を向けてました。僕に気があると思いましたが、だからはつきりと言ったんです」

「自分の気持ちををはつきりと言うのはいいことだと思う。だけど時にはそれがマイナス効果にもなることがあるのよ。言葉を選ばないと相手によったら180度人格を変えるきっかけにもなってしまう。特に好きという感情が入っていると暴走する場合があるのよ」

「そうですね。それが引き金となって恨みを買うことにもなりかねませんね」

「要するに相手にも気を遣い、また自分の良いようにもっていくのが大事ね。そんなことが簡単にできるなら争いごとなんて起きないでしょうけど」

「世の中は常にどちらかがいい思いをして、どちらかが嫌な思いをする」

「そう、まさに不公平な世界。自分がどっち側かに立ってるしかない」

「姐御はいつもどっち側に立ってるんですか？」

「もちろん恵まれてる方に決まってるじゃない」

「だから、人に何か理不尽な事をされても何も言い返しめせず、我慢できるんですか？ この間社員食堂で一揉めしたように」

「そうね、そうなのかもしれない。結局は上から人を見ていて、私はズルイ女なのかも」

「そんなことはないです。姐御は能ある鷹なんですよ。能力のある人間は滅多に力をひらけかさない」

またここでもあのことがわがでてきて、ケムヨは黙り込んでしまった。

そして誤魔化すようにグラスを口に運んでぐつと酒を飲み干す。

その後は同じものとバーテンダーの目を見て訴えていた。

そして二杯目のグラスが目の前に置かれたとき、背後から怒鳴るような声が聞こえてきた。

「なんだい、その態度は。俺様を誰だと思っているんだ」

陳腐な芝居がかった言い回しは、わざとらしくその場の注目を浴びるが為に発せられた声だった。

ケムヨはその声の方を振り向いた。

そこにはカラフルなシャツが胸元から覗き、いくつかボタンを外した首元に金色のチェーンもちりと見え、一般人が普段着として着ないような派手な白いスーツを着た男が椅子にふんぞり返って座っていた。

「ですからお客様、申し訳ございませんが、ここでは他のお客様に迷惑になるようなことはご遠慮お願いしております」

その場を丸く治めようと腰を低くしてこのバーの店長が諫めているが、その男は全く聞く耳持たずだった。

「何言つてんだ、この野郎。ちょっと可愛い子が居たから声を掛けて一緒に飲もうとしただけじゃないか。なあ、姉ちゃん困ってなんてないよな」

あの様子から見れば、ガラの悪そうなチンピラ風の男が側に居た女性客をナンパしようとしていた。

なだめようとその店の店長が、事なきを得ないようにとひたすら頭を下げていた。

しかしその男の横柄な態度は収まることなく、執拗に絡んでいく。

ケムヨは目を細くしてその光景を睨んでいた。

チンピラは注目を浴びることを楽しむかのようにまだ女性客に絡んでは、周りの反応を見ていた。

目が合った客には容赦なく睨み返す。

ケムヨはおもむろに立ち上がり、コツコツと踵を床に響き渡らせてそのチンピラの男の前に立ちはだかった。

「姐御っ……」

タケルはハラハラしながらその様子を見ている。

変なことにならないかと最悪のことを考えているときに案の定ケムヨは食ってかかってしまった。

「ちょっとあんた。うるさいじゃないの。静かにしてくれない？」

「なんだ、姉ちゃん。なんのつもりじゃ」

当然チンピラ男も受けて立つ。

「ここはこの店に合った善良な客がお酒を楽しむところよ。あんた場違い！ さつさと出ていきな」

「俺を誰だと思ってそんな口叩いてるんだ？」

「チンピラでしょ。それもこの辺りだったら、K組がY組がらみでしょうね」

「へえ、姉ちゃん結構知ってるやん。それを分かかってて食いかかってくるとはええ度胸しとるやないか」

売られた喧嘩は買うのが決まりなのか調子に乗ってチンピラは答えていた。

それが典型的な態度だったのでケムヨは大きく情けないため息を吐いた。

「どうしてあんなのようなチンピラってお決まりの言葉しか言えないの？ もっと違うこと言ってよ」

「何言うんじゃ、ふざけるなこのアマ」

チンピラは威嚇するように突然立ち上がり、ケムヨを怖がらせようとする。

だがケムヨは全くそんな脅しには動じず、物怖じするどころか、自ら顔を近づけて睨み返した。

「あんだこそ、この私が誰だか分かってないようね。私に手を出したら偉い目に遭うよ。指一本じゃすまないぐらいにね」

ケムヨは力強い目つきを向ける。

一瞬、チンピラは怯んだ。

脅しの効かないケムヨから只者じゃない雰囲気を読み取ってしまった。

その時、タケルが見ていられないと心配のあまりに「姐御！」と声を掛けてしまった。

それが機転となり、チンピラの威勢が急に弱くなる。

「えっ、姐御？」

ケムヨはそのチャンスを見逃さなかった。

「もう一度言うからね。あんだこの私が誰だかわかってる？」
意味ありげにケムヨはゆっくりと言った。

「ちょっと、待って、えっ？ それって」

「最近この辺りの土地を狙ってわざとこの辺の店の印象を悪くしよ

うと営業妨害で悪態ついてるんでしょ。あんたはチンピラだから小遣いほしさに誰かに頼まれて遊びでやってる程度でしょ。本格的な組織がらみだったら一人でなんて来ないでしょうし」

凶星だったのか、チンピラはその質問に答えなかった。

「まあいい、後で調べたら、どこの組のもんかってわかるし、そんなことさせないようにつちも手を打ってやる。言つとくけど、この辺の土地はうちのもんだ。好き勝手にさせるか。そっちこそ、私が女だからってなめたらあかんぜよ！」

ケムヨは少し調子に乗って、どこぞの映画の台詞を言い切り、片足を上げて思いっきり床を踏んだ。

「えっ、ちよつとあんたどこの組のもんなんじゃ？」

「そんなの自分で調べな。まあ、こんなことしてるってばれたらただじゃおかないだろうけど。黙って何事もなかったように早くここから出て行かないと、こっちも助っ人頼むから。店長さん、電話貸して下さい」

「あつ、は、はい」

店長が機敏に動くと、チンピラは急に焦りだし、ジリジリと体が後ろに下がって額から汗が流れていく。

その間ケムヨは睨みを効かしたままチンピラから目を逸らさない。

そして再び店長が現れると電話を手渡された。

ケムヨはそれを手にしてプッシュし始める。

一体誰に応援を頼むのだと、チンピラは上から押されて縮こまるように緊張しだすと共に戦慄を感じ始めていた。

電話が繋がったのか、ケムヨが喋りだす。

「もしもし、おじいちゃん？　今、友達と飲みに来てるんだけど、訳の分からないチンピラがおじいちゃんの土地狙ってて、うん、あつ、それってK組、なるほど、それでね……」

そこまで会話を聞くと、チンピラは、顔を真っ青にして後ずさり店の出口へと向かっていく。

出口がすぐまじかになると慌てて走って逃げていってしまった。

そしてそれを見ていたお客達は一斉に拍手をする。
ケムヨは報告も兼ねて祖父に一部始終話していた。

「もう、ハラハラしましたよ。どうしてあんなことするんですか」
一段落して、タケルが小言を言うようにケムヨを諷める。

二人が座るカウンターの前には色んな料理が並んでいた。
全て店のサービスだった。

チーズの盛り合わせから、ブリーをつまむとケムヨはぱくつと鯉が食いついたように食べていた。

「だって腹立つんだもん」

口をモゴモゴさせて箸った声で答える。

「それにしても怖くなかったんですか？」

「全然、それに刺されても構わなかった」

「えっ、ちょ、ちょっとそんな」

「どうせ、刺されるわけじゃない。一般人を巻き込めば警察とかすぐ来て不利益被るのは向こうだし、そこまで度胸なんてないよ、あのチンピラは」

「姐御って、肝が据わり過ぎ」

「でもやつぱり、私も権力使っちゃった。結局は力なんだよね。それが善でも悪でも力を持つてるものは絶対強い」

「それで幸造さんは一体なんて言ってたんですか」

「まあ、程ほどにしておけて。暢気なもんだった。うちもあいう組織の中のトップの立場だからね。ある程度はそれなりのコネを持った権力とつるんでるから怖くないってことだと思っ」

ケムヨはもう一切れのチーズをつまんで、それを弄ぶようにして

話している。

悪いものを排除して、店からも客からもヒーロー扱いされている立場だというのに、ケムヨの顔はすっきりと晴れていなかった。

寧ろ、自分の立場を公にさらしてそれを盾にいいように利用することへの罪悪感で自己嫌悪に陥っている。

「姐御……」

タケルは気を利かして何か話し掛けたが、その前にケムヨが質問した。

「ねえ、タケルは親の七光りとかで嫌味言われたり、妬まれたりと陰口たたかれたりすることってない？」

「まあ、直接は言われたことないから分かりませんが、きっとそういう風に思う人もいることでしょう。いちいち僕は気にしてません」

「そう」

短く返事すると、ケムヨはつまんでいたチーズを口に放りこんだ。そしてその後はそのことには触れずに、店の折角の厚意だからと目の前の料理を食べることに忙しくなった。

タケルと別れ、ケムヨは家に向かって歩いていくところだった。

街灯が灯る下町の住宅街。

時々自転車に乗ってる人や犬の散歩をしている人とすれ違った。

ほんわかとどこからか夕飯の用意をしている匂いもする。

それらがおぼろげになって視覚、嗅覚に届いているが、頭の中はチンピラとの対峙が何度も再生されるように思い出されていた。

店を出るときは何度もお礼を言われ、また来てくれと熱く誘われ、仕舞いには神の様にあがめられた。

ケムヨは苦笑いになりながら店を出たが、タケルはさっきのチンピラが仕返して待ち伏せしていないかどうか警戒して落ち着きがなかった。

結局は何もなかったが、ケムヨはチンピラを撃退したことが本当に正しかったのかと今頃になって不安になっていた。

もし危害を与えられていたら――。

そう考えてもケムヨは痛いのはいやだが、それなりの覚悟を持ってやったことには変わらなかったと悪い方向になったとしてもそれは運命だと諦められる。

あの時は本当に死をも覚悟してやったことだった。

ケムヨはいつも生と死を頭に置いていた。

それなりの意気込みを持って、自分の人生に悔いなしと思ってやったことだったのに、自分の立場を再認識する羽目になってしまったことが落ち込ませる。

ふーっとため息をついて家の前までやってきたとき、不意に大きな岩のような塊が暗闇の中で動いたのでドキッとびつくりした。

「チチチチ、プリンセス」

連続で舌打ちするような音と、奇妙な英語の単語が聞こえる。

ケムヨが固まっていると、その大きな塊が更に目の前で膨れ上がるように大きくなって自分に近づいてきた。

それは男性の人影だった。

「あつ、ケムヨ？」

自分の名前が呼ばれると、薄っすらとその人影の顔も見えた。

「げっ、将之！ 一体何してるのよ、こんな時間に」

「ケムヨこそ、遅かったな。何してたんだ」

「ちよっと待ってよ、もしかしてずっと私を待ってたの？」

「違う！ 俺はプリンセスに会いに来たんだ」

「プリンセス？ 王女さま？ 誰よそれ？」

辺りは暗かったが、街灯や建物から漏れる家庭内の明かりでぼわっと将之の姿が浮かび上がっている。

そして手に何か持っているのに気がつき、ケムヨはそれに集中して目を凝らす。

「この間ここに来たときさ、猫に出会ってさ。プリンセスって、俺が勝手に名づけたんだ。それがもうちよっとで触れるくらいだったのに逃げやがってちよっと悔しかったから、これで昨日からここで餌付けしてるんだ」

そして手に持っていた煮干を振って楽しそうにしている様子はケムヨの声を奪うには充分だった。

それ以上に呆れすぎて魂までも奪われそうだった。

暫く放心状態のまま、ケムヨは将之の目の前でじっと立っていることしかできなかった。

将之は明らかに暗闇の中で笑っている。

白い歯がチシャ猫のようにぼーっと浮かんでいるように見えた。

「ちょっと、昨日もここに来てたの？」

将之に飲まれてはいけないと体制を整え、ケムヨは呆れた声で責める。

「うん、昨日、俺がここへ来たときはケムヨはもう家に居たみたいだね。偶然窓からシルエツトが見えた。仕事いかなかったのか？」

だがそんな問い詰めにも将之は堪える訳もなくあっさりと返され、反対に再びケムヨが追い詰められた。

「えっ？ い、行つたわよ、でもちょっと早く帰ってきたのよ。私パートだから時間自由なのよ」

突然パーティーで追いかけられたことを思い出し、将之にばれてそれを調べに来たのではないかとケムヨは緊張した。

「ふーん、パートなのか。それにしてもそれにそぐわない暮らしと
いうのか、見かけと中身が合っていないというのか、なんか全てにギ
ヤップがあるな」

「な、何よ！ そんなのあなたに関係ないでしょ。それに黙って家
の周りをうろつくなんてストーカーじゃないのよ！」

「普段は冷たく冷静なのに、ムキになるところがなんか怪しい」

暗闇で将之に顔を突き出されてケムヨは後ろに仰け反る。

将之は闇の中でどうにかしてよく見えるようにしようと目を細ませた。

「あんた、アレだろ。親のすねかじりの我まま娘」

「ちよつと失礼ね。私は私なりにきっちりやるべきことはやって

ます。将之こそ親の会社をぬくぬくと継いで何も苦労してなさそうじゃない」

ケムヨは負けずに応酬する。

その言葉に反応して、暗闇の中でも充分将之の目つきが鋭くなったのがわかった。

「ふん、分かったような口聞きやがって。ああ、勝手に想像してくれ」

からかい気味でおちゃらけだった将之の態度が一変する。明らかに怒りの炎が淡く街灯に照らされて瞳に映っていたように見えた。

「何よ、言いだしつぺはあなたじゃない。今日は私疲れてるんだから。あなたに構ってる暇なんてないの！」

将之から離れたいと思ったその時、ケムヨの足元に何かが触れた。それに驚き「キャッ！」と声を上げるとバランスを崩して将之に抱きつくように倒れこんでしまった。

「おいっ、大丈夫かよ」

将之も咄嗟のことに条件反射で軽く抱きしめるように受け止める。事故だったとはいえ、お互い体を密着させてしまった。

ケムヨは抱きかかえられたまま何が起こったのかわからず、その時、時間の概念が吹き飛んでしまった。

温かな体温のぬくもりを微かに感じ、しっかりと受け止められた胸板の厚さに頼りたいという感情を呼び覚まされる感覚に陥る。

かつて恋人だった翔に抱きしめられていた心地よさが脳裏に浮かぶ。

暫くそんな感情に支配されていたが、「ニヤー」と足元から声が

聞こえ、ケムヨは目が覚めたようにはっとして将之から離れた。

「あつ、プリンセス！」

将之はさつとしゃがみこみ猫と向き合った。猫は少し後ろに後退しながらも将之の様子を伺っている。

「やつと会えた。ほら、煮干持ってきたぞ。食べ」

煮干を猫の目の前に突き出すと、用心深く距離を置いて鼻をヒクヒクとして匂いを嗅いでいる。

ようやく食べ物だとわかってきたのか、少しずつ近づぐが警戒心で体は後ろに引つ張られるように前を進んでいる。

やつと煮干に近づき鼻がくつつくほど匂いを嗅ぐと、食べたいという感情が芽生えて舌でペロペロとなめだした。

将之が煮干をもっと突き出すと、猫は怯んだ。

「コイツ用心深いな」

煮干を軽く投げて、猫の足元に落としてやった。

猫はそれを素早く口に銜えて走り去る。

「あつ、銜えて逃げやがった」

将之はゆっくりと立ち上がり、暗闇に逃げて見えなくなっても猫がまだ戻ってくるのではと期待して待っていた。

「猫なんてあんなものよ。自分主義で誰の言うことも聞かず、そして頼らずに気ままに生きていく」

ケムヨは自分の心情と重ね合わせたかの言葉を発す。

「そっかな、まだ警戒心が強いだけさ。慣れたらそのうち寄って来る。そして人間に頼ることも悪くないって学んで行くぜ。猫だって

体を撫ぜられるのは好きだと思う。ケムヨだってそうじゃないのか」
「はっ？　どういう意味よ」

「別に深い意味はないんだ。なんとなくそう思っただけのこと」

将之は事故だったとはいえ、ケムヨが自分に倒れ掛かってきたことを考えていた。

強がってはいるが、ケムヨを抱きしめたとき華奢な体つきが壊れそうだった。

そして一瞬でも自分の胸の中で大人しく収まって、それが普通の女の子らしく弱々しいものに思えた。

本当は誰かに頼りたいという気持ちを秘めているのではないだろうかとふと頭によぎったのだった。

ケムヨも心の中を見透かされた居心地の悪さを感じ、話を逸らすとした。

「だけど、あの猫がなんでプリンセスよ。ただの汚い三毛猫じゃない。あれは絶対野良猫よ。勝手に餌なんかやったら後が困るじゃない」

「三毛猫って遺伝子上の関係でほとんどがメスだろ。それに色々な色が混じってパッチワークみたいでさ、ツギハギだらけの衣装を纏ったシンデレラって感じがしてさ、だからプリンセスって名づけた。心配するな餌をやるからには俺は責任を取るよ。俺に慣れて、捕まえられるようになったら俺が飼う」

「そこまで考えてたの？」

「まあね。でもまずは手懐けないことには話しにならない。俺だって飼うならまずは好かれない。そしてそのときが来たら俺が救って

やるんだ」

「なんか大げさね。まるでどこかの王子様のよう」

「王子様か。それもいいな。なんだったらついでにケムヨの王子様になってもいいぜ。合コンでも言っただろ、俺が救ってやるって」

「結構よ！ 王子様はもう要らない。私は一人で自分の力で生きていく。そんな女なの」

「王子様はもう要らないって、まるで過去に王子様が居たみたいだな」

「まあね、二人いたかしら」

「なんだよ、もしかしてその二人に振られたのか」

「そうね、一人は振られたけど、もう一人は死んじゃったわ」

「えっ？ 死んじゃったってどういうことだ」

「もうそのことはどうでもいいの。夢を見る年じゃなくなったってこと」

「一匹狼ならぬ、一匹猫ってどこか？」

「なによそれ」

「気ままに暮らす気品高い野良猫のような女性の例え」

「ちよっとそれって侮辱してるの？ 将之に言われたくないわ」

「いいじゃないか。おれはそんな猫も女も好きだ。さてとそろそろ帰るか。今度はプリンセスに何を持ってこよう」

「あなたまた来る気？」

「当たり前だろ、プリンセスを手懐けるんだから」

「それなら罾でも仕掛けて捕まえればいいじゃない」

「ケムヨだって会ったばかりの男から無理に結婚迫られても困るだろ。猫だって無理に捕まえられて嬉しくないはずさ。それと一緒にさ」

「すぐに捕まえても面白くないし、それにケムヨに会いに来る口実

が減るじゃないか。それじゃな」

言いたいことを言っただけでさっさと将之は去っていった。

どこまでも強引で無理がある。それはホテルのパーティで追いかけて実証されているはずなのに、それでもいつも将之の行動には驚かされる。

そして闇に溶け込むように去って行く将之の後姿を見てケムヨは無意識に口元が微笑んでいた。

呆れもあつたが、憎めない奴だと本当は分かっていた。

将之は一度振り返る。

もうシルエットしか判別できなかったが、しっかりと手を振っていたのが見えた。

「またな、ケムヨ」

まるでケムヨが見送っているのを知ってたと言わんばかりに、将之の声は優しく暗闇のまどろみの中、粒子のように漂ってケムヨの耳の中で気持ちよく弾けていた。

「少しは発展があつたか……」

夜空を見上げながら将之はごちゃごちゃと住宅やビルに囲まれた街を歩いていた。

本当はもう少し強引になってケムヨと時間を過ごしたかったが、猫と同じようなもので無理強いをすればただ逃げるだけだとプリンセスに教えられたつもりでいた。

プリンセスが現れて自分の差し出す煮干に興味を持ったように、事故だったけれど偶然にケムヨを抱きしめたことで少し興味を持ってくれたのではと期待していた。

まだまだ事は始まつたばかりだが、合コンで会ってから興味を惹かれたのをきっかけにここまで執着する自分がおかしくなってしまう。

夜という、一日で一番嫌いな時間だというのに、星を見つめていると自然と笑みが綻ぶように現れる。

「ケムヨはなんだか夜の星のイメージだ」

明るい昼間は目立たず、暗いところでひっそりと輝く。

しかし、その輝きは自ら放つ真の輝きであり、月のように太陽の光を頼らずしっかりと輝いている。

だけど少し意地になりすぎて、後ろめたくその輝きを人に見せないようにしている雰囲気を持つ。

まだ出会ったばかりで何も知らないが、少しずつケムヨを知りた

いと思う気持ちが会う度に好奇心を掻き立てられる。

自分に振り向かない女。

だからこそ振り向かせてみたい。

それこそ自分にふさわしいんだと将之は本能のまま恋の駆け引きを試みてしまう。

どこかゲームっぽい気もするが、しっかりと好かれない欲望を抱いている。

どこかで心の寂しさを埋めたいと将之は街の光で見えにくくなつた星を食い入るように見つめていた。

将之が去ってしまった後、ケムヨは家に入る前にもう一度辺りを見回してプリンセスを探してみる。

たまに見かけていたが、将之が餌付けをしていることをきっかけに急に気になってしまった。

三毛猫独特の白色をベースに茶と黒の色が混じりあい、決してきれいな猫ではないが交じり合った色の模様は愛嬌がある。

そんな猫に恐れ多くもプリンセスと名づける将之のセンスがなんか可愛くて微笑ましく思えてきた。

「あいつ結構ロマンチストなのか」

ケムヨなら安易に『ミケ』や『ノラ』と名づけてしまいそうなのに将之の感覚に脱帽だった。

暗いケムヨにも執拗にアタックをかけてくるような男でもある。どこかマニアックのような、普通の人と違う部分をケムヨも感じていた。

女性受けするような整った精悍な顔だちで地位や力を持ってそうなのに。

そして不覚にも将之に抱きついてしまったことが、この時になって恥じらいをもってしまう。

あの時、忘れていた感情が芽生えて正直心が安らいでいた。
ケムヨは決して口に出すことはないが、嘘をついても仕方がないとその部分は素直に認めざるを得なかった。

それよりも、自分のことを親のすねかじりと言われ、そして対抗するように将之のことも親の会社をただ継いだだけのように言ってしまったことが気がかりだった。

二人ともそのことには触れなかったが、どちらも忘れたいとはばかりに無理をしてあの時無理やり排除していた。
お互い共通するような問題点を抱えている。
ケムヨはそんな気がしてならなかった。

家のドアを開ける前にケムヨはもう一度暗い闇を振り返り、そしてふと空の星を何気なく見つめた。
星だけが傍観するように全てを知った上で見つめている。

「いいご身分だ事」

そんな言葉が自然と出ると、将之と抱き合っていたこともしつかりと見られていたんだとふと笑えて来る。

そんな風に受け止められることで、落ち着いて将之のことを少し考えられるようになって来たかもしれない。

『少し距離が近づいたんじゃないですか』

家の中に入る直前に星にそんな風に言われたような気になった。それともただの自分の本音というところか。ケムヨはまだこの時は軽く考えていられた。

その頃、プリンセスは将之から貰った煮干を、夜空の下で誰にも邪魔されないような入り組んだ路地で隠れながらむさぼっていた。久々に味わう魚だったのか、噛むとき『ウニヤ、ニヤー』などと言声漏れている。

食べ終わった後は、丁寧にも何度も手を舐めて、顔を洗う。

最後は上手かったと言わんばかりに口の周りを長い舌でプロペラを回すように舐めながら夜空をぼんやりと眺めていた。

そしてまたむくつと立ち上がって寝床を探しに去っていった。しまった。

夜空の星は全てを上から静かに見つめていた。

この先何が起こってもただ感情を込めずに冷たく輝くだけだった。

「お帰りなさいませ、笑美子お嬢様」

シズが背筋を伸ばし旅館の女将のような気品さを添えて玄関で出迎えてくれた。

「あの、お嬢様。先日ここに来られた男性ですが、確か篠沢さんでしたね。あの方ずっとこの辺りをうろついておられましたか」

「ああ、気にしないで。構うとややこしくなりそうだから放っておいてあげて。猫を手懐けようとしてるだけ」

「はあ、猫ですか……」

ケムヨは廊下を歩き部屋の前まで来たとき、シズは思い出したかのようにまた声を掛けた。

「あつ、忘れるところでした。近日中に平日でお休みが取れる日はございますか？」

「平日で休みが取れる日？ どうして？」

「いえ、その、たまにはお嬢様とお買い物にでも思いました」

「買い物？ シズさんと？ 平日に？」

「は、はい。だめでしょうか？」

「別にいいけど。どうしたの？ なんか珍しい」

「いえ、そ、その。どうしてもお嬢様に見立ててもらいたいものがあります、それが平日じゃないと都合が悪くて、その……」

シズは言い難そうになくともっていた。

ケムヨは首をかしげながらも、シズからの頼みとあれば邪険にできないと快く承諾する。

後でスケジュールを調整すると言って部屋に入って行った。

部屋の閉まる音がすると、シズは胸に手を当てふーっと息を吐いていた。

何か企んでいるのは明らかだった。

そんなことも微塵も知らずケムヨがこの日の一日の疲れを取りたいと部屋で一息ついたとき、携帯電話が鳴り響く。

携帯電話の画面を見れば、夏生からだった。

「もしもし、どうしたの？」

「あつ、ケムヨちゃん。この間はごめんね」

「何度も謝らないでよ。あれから何回同じこと言ってくるのよ。もういいから」

「でもなんか気になっちゃって言わずにはいられない」

「だったらなんであんなことしたのよ」

「ほら、やっぱりまだ怒ってる」

「だから怒ってないって。それでそんなこと言うためにまたわざわざ電話してきたの？」

「あつ、違うのよ。真理絵から聞いたわ。優香さん合コンのことで怒ってるって。それでケムヨちゃんにもなんか被害行ってるのかなと思って」

「えっ、別に何もないけど、確かに優香さんは取り乱すくらいシヨツク大きかったみたいね」

「やっぱり」

「でも夏生は気にすることなんてないよ。それに合コンしたからってすぐにカップルになれる訳でもなし、優香さんがあの場所にいるも上手く行かなかったと思う。結局は皆発展なしでしょ」

「それが、真理絵と義和さんなんだかいい雰囲気なのよ」

「えー、そうなの。それはすごい」

「まだ知り合ったばかりだから、友達になった程度だけど、この先わからないよね。そういえばケムヨちゃん、将之さんとはどうなったの？ 将之さんはなんだかケムヨちゃんのこと気に入ってたみたいだったけど」

「えっ、それは、その……」

ケムヨはなんだか慌ててしまった。

向こうから来るとは言え、将之とは合コンの後も会っている。

望んでないのに偶然出会ったりもしている。

それを夏生に話すべきか迷っていた。

「ケムヨちゃん？ どうしたの？」

「ううん、なんでもない。私の趣味じゃないし、どうでもいい存在」

「そっか。別に無理強いをしているわけじゃないんだけど、あのさ、ケムヨちゃんはまだ翔さんのこと引きずってるんでしょ」

突然『翔』という名前を聞いてケムヨは条件反射のように息が詰まってしまった。

「おせっかいかもしれないけど、ケムヨちゃん、そろそろ他の男の人と付き合ってもいいんじゃないかな。そうした方が翔さんのことも忘れられると思うんだ」

「夏生が心配してくれる気持ちは有難いと思うよ。でも夏生だって私の立場わかってるでしょ。うちのおじいちゃんがどういう人かも知ってるでしょ」

「それは分かっているけど、でもケムヨちゃん、あれから変わっちゃたから、なんか見てられなくて。それにもうすぐ翔さんも海外から帰ってくるから、その前になんとかしたかったの」

夏生は気まずい思いを抱えながら小さな声で言った。
ケムヨはなぜ夏生が騙してまであんなことをしたのか大体の道筋が分かってきた。

「夏生はそのこと早くから知ってたんだ。誰がその事を話したかなんとなく想像できるわ」

「うん、ちよつと偶然に小耳にはさんじやった」

誤魔化せないと夏生は素直に認める。

「でも、大丈夫だよ。心配してくれてありがとう。それにね、実は正直に話すと、将之とはあの後も会ったりしてる」

夏生の気持ちも汲み取り、翔の話題が出てしまったことで自分の動揺を隠すためにもケムヨは将之の話題を自然に口にしていった。

「えつ、それほんとなの？」

「うん。友達になっただけ。でも少しは進展してるでしょ」

「すごい。そんなに仲良くなったんだ」

そこまで仲がいい訳じゃないといたくなつたが夏生を安心させるためにぐつと体に力を入れて「うん」と答える。

その時、将之のニタついた顔が頭に浮かび、ケムヨは思わず宙でパンチを食らわしていた。

その後は夏生と暫く他愛もないことを少し話し、携帯電話を切った。

大きなため息が漏れ、部屋の中が籠ったようになる。
ベッドの上にゴロンと横になり、寂しい気持ちを抱きながら翔のことを思い出してしまう。

大丈夫と言っても、心の中と口先は一致していない。

翔が戻ってきたとき、自分はどっぴんしゃんしてしまうのだろうとケムヨは枕を手に取り体を横向けに九の字にしながらぎゅっと抱きかかえていた。

『猫だって体を撫ぜられるのは好きだと思う』

ふと将之の言葉が蘇り、そして事故ながらも将之の胸にもたれ掛かったことを思い出す。

この時、不意に誰かに抱きしめて欲しいと思ったが、突然下唇をキュツと噛むことでそう思ったことに反抗しているようだった。

力を込めて枕を抱きしめる。

強くなろうと必死に耐えながらも、翔との思い出がフラッシュバックしてケムヨの胸は締め付けられていた。

夜も益々深まり、将之が家路に向かい暗い夜道を歩いている時、背広のポケットに入れていた携帯の音楽が鳴った。

画面を見れば番号と共に『篠沢修二』と名前が出ている。

将之の兄だった。

「なんか用か、修ちゃん」

「将之、今何してる？」

「何してるって、自宅のマンションに戻る途中」

「こんな時間にか？ 最近仕事終わってもまっすぐ家に帰ってないみたいだな。もしかして久しぶりに新しい彼女できたか」

「まだそこまではいつてない。今はアタック中」

「なんだやっぱり女か」

「そんなことわざわざ訊くために電話してきたのか？」

「違う、仕事の件だ。あのイベントのことなんだが」

「もしかして今週の土曜日開催のイベントのことか？」

「そうだ。時間がなくてちよっと手伝って欲しいんだ」

「はいはい。兄さんの頼みだ。お安い御用ですよ」

「そっか、恩に着るよ。それから、母さんがたまには実家に帰って食事しに來いだって。一人暮らしで栄養偏ってないか心配してたぞ。たまには母さんに甘えてやってくれ。俺よりも将之が甘えた方があの人は喜ぶ。お前の方がだんぜんかつこよくハンサムだからな。俺よりも愛されてるぞ」

「何言ってんだ。修ちゃん」

「でも本当のことだ。特に俺は訳ありの息子だからな。将之の方が母さんは好きなんだよ。それに父さんもな。会社が大きくなったのはお前のお陰だ。俺も将之のお陰で好きなことができるってもんだ。

でのいい弟を持って本当に感謝してるよ」

「将来は長男の修ちゃんが後を継ぐんだぜ」

「俺は辞退させてもらう。将之が継げ。篠沢家の跡取りはお前だ」

「修ちゃん！ それは……」

将之の言葉をかき消すように修二は話を締めくくる。

「とにかくイベントのことはよろしく頼む。それじゃまたな」

音を繋ぐパイプがスパツと切れたように電話は反応をなくした。

兄の修二は事あることに跡取りや両親のことを持ち出してくる。

まるで将之が何も気にしてないと思うかのよう。

いや、気にしてるのを分かっているから気を遣って言うてくるのかもしれない。

兄の修二のことを将之は物心ついたときから大好きだった。

父や母も優しくこの上ない両親に恵まれたと心の底から思っている。

目立った言い争いも、喧嘩もしたことがない。

常に理想を絵に描いたような家族であることは間違いない。

だけど将之はため息を吐いていた。

そして夜の闇に寂しさを植え付けられそうになるのを必死に堪えて自分のマンションに早足で向かう。

まるで迷子になって心細さにベソをかいた子供のように。

26歳という若さで父親が経営する会社の重役クラスにつき、同じ年代の者と比べれば、そこそこ稼げて地位もある。

将之のことを知らないものがその事実だけを見れば、親の元で決められたルールをただ歩む恵まれた奴とでも言われそうだが、実際将之は汗と血を滲ませたくらいの努力をしてここまで来たのかもしれない。

もちろんそんなこと自分では口に出しては言わない。

ただ常に妥協を許さず、無理をしてでも登りつめてきた。

本当は負けそうになるくらいの寂しさを胸に潜め、孤独を感じないように演じているに過ぎなかった。

すれ違う車のライトを時折眩しいと目を細めて見つめ、将之は自宅前まで来ていた。

街の中心からも近く、都会にふさわしい高いビルが建ち並ぶ景色が見回せる高層マンションの一角に将之は住んでいた。

一人で住むには広い間取りだが、仕事もできるオフィスの役割も果たしている。

その部屋に戻り、帰るなり早速冷蔵庫から冷えたビールの缶を取り出す。

それをもってベランダに続く窓を開けて外に出た。

周りのビルから漏れる明かりが夜の暗さをはじけ飛ばしている。空には見えにくくなった星が点々とおぼつかない光を出していた。缶のプルトップを引き、一口で飲めるくらいの量を口に含んでこくりと飲み込んだ。

「またあいつと一緒に飲んでみたい」

夜の冷気に冷やされた風を受け、将之はケムヨのことを考える。

ケムヨを追いかけているときは、ゲームに夢中になって遊んでいる子供のような純粋な気持ちになれる。

子供の時はそんな風に遊んでいたもんだと自分を振り返る。

あの時は無邪気に何も深く考えずに、好きなことをしていた。

その先も暫く子供のままの心でいられたらどんなによかっただろうか。

将之はほんの少ししかそんな時間を過ごせなかった。

また缶ビールを口元に持っていき、今度は一気に飲めるところまで喉に流し込む。

酔えるなら酔いたい。

少しでも今の自分を忘れてしまいたい。そんな願望を持っている。

「ケムヨと飲んだら、我を忘れてしょうもないことで意地を張っても楽しく勝負できそうだ。俺に振り向かない女。即ち同情も情けもかけずに対等で付き合えるってことだ。名前もナサケムヨ（情け無用）だしな。だから俺、あいつのこと気に入ったのかもしれない」ケムヨのことを考えると急におかしくなってきたとずっと笑っていた。

そしてビールを飲みきると、軽くくしゃつと缶を潰していた。

「さて、明日もプリンセスに会いに行くか」

将之がそう呟いたが、このときのプリンセスは猫よりもケムヨのことを意味していたかもしれない。

翌日、身支度が整って朝食を食べにダイニングへとケムヨは向かった。

「お嬢様、今日はあちらのお仕事ですね。掛け持ちで働くのも大変ですね。どうかお体にはお気をつけて下さい」

シズがダイニングテーブルにコーヒーを差し出した。

やはりここも、アンティークの古さはあるが外見のおんぼろの建物にふさわしくなくらいの立派な雰囲気とする空間だった。

金持ち風の洋館の中のダイニングルームと呼ぶのにふさわしい作りをしていた。

椅子に腰を下ろし、用意されていた朝食の隣で新聞を広げ全てを把握するように見つめながら、ケムヨはシズから出されたコーヒーを手に取って口をつける。

「働くって言ってもまだ本格的なことはしてないし、掛け持ちしてるせいで気分は楽なのかも」

「だけどいつかは旦那様をお継ぎになる時がきます」

「その時はその時ってことね。本当は継ぎたくないのに。全ては父のせいなんだから」

「順番でしたら、若旦那様が次の跡取りなんですけど、放棄されましたからね」

「だから恨んでるのよ。それに私を捨てて母と逃げるように遠いところいっちゃうし。無責任すぎる。あれでも親か」

「でも、お二人ともお元気でいらっしゃるでしょうか」

「逃げるくらい体力あるんだから、もちろん元気でやってるでしょう」

「たまには顔を見せにでも帰ってこられるといいんですが」
「帰ってきたらただじゃおかないんだから」

ケムヨは熱いコーヒーに息を吹きかけて冷ますが、冷まさなければならぬのは自分の頭だと気がついた。

そんなことを今更考えても仕方がないと、自分の与えられた仕事をこなす覚悟をする。

やるべきことがあり、必要なものも揃って持っているから余計な心配事を抱えずに済む。

自分は恵まれている立場だと再認識して、湯気が立つ熱いコーヒーをすすっていた。

そして朝食を食べた後、シズに見送られながらゲンジが運転する車に乗って仕事場に向かった。

ケムヨにとつたら雑用をするパートの方が気が楽だった。

それでもこの日の仕事もやりがいがある点では頑張りたいと結局は思ってしまう。

本業はこちらだが、隠れながらこそそと働いていた。

ナサケムヨという名前は全くの仮名であり本名を隠しているが、こちらの仕事をするときは本名で働いている。

ただ表に出ず、顔はあまり知られないようにしているのには後ろめたい理由があるからだった。

この仕事を終えるときは、いつもはゲンジが迎えに来て、帰りもその車に乗って帰るが、最近将之と知り合ってしまった、そいつが時折家の前でうるちよろすることを考慮すると送り迎えをされていることは知られたくなく、帰りは自分で帰るとゲンジに伝えていた。

パートと違って頭を働かせることばかり続き、神経も磨り減っているためにとっても疲れていたが、皆そんな中を通勤している。

自分ばかりが特別ではないと、サラリーマンに囲まれた電車の中でケムヨはつり革を持って揺られていた。

そして案の定、家の前に来ればあの男が見事にそこに居た。あまりの分かりやすさに、ケムヨは思わず噴出してしまう。どこまでもしつこく拘る男。

根性が据わっている奴なのか、只のおバカなのか、その時は後者だと思ってケムヨは将之に近づいた。

「やっぱり今日も餌付けに来ていたのね。プリンセスとは会えたの？」

「少しこの辺りも歩いたんだけど、まだ出会ってない。それならここで待ってた方がいいだろうと思ってね。今構えているところ」

「それで今日は何で釣るわけ？」

「これさ」

将之は手に提げていたビニール袋を前に突き出した。

「何よ、これ。缶ビール、イカの燻製にスナック菓子」

「一杯やろうぜ」

「ちよつと、猫を手懐けにきてるんじゃないの？」

「もちろんそうさ。ちゃんと煮干をそこに置いたよ」

門の端に煮干が乗せられた小さな紙皿が置いてあった。

「俺が側に居ると、警戒して近づいてこないかもしれないから、少し離れていた方がいいと思うんだ。さあさ、ケムヨの部屋で飲もうぜ」

将之はケムヨの背中を押して門を押して、ドアの前へと突き進んだ。

「ちよつと待ってよ。なんでそうなるのよ」
「友達だろ」

「おいっ！」

ここまで強引だと圧倒されすぎて言われた通りに行動させられてしまう。

気がつけば、ドアは開けられ家の中に入っていた。

「お帰りなさいませ」

シズは挨拶するも目の前の将之を見て動揺していた。

「どうも、お邪魔します。いや、ケムヨさんから一緒に飲もうって誘われたもので」

しゃーしゃーと将之は笑顔で答える。

「誘ってなどおらん！」

ケムヨは訂正するが、シズはお客様の手前上、丁寧に受け答えるしかできなかった。

「そ、そうですか。ええと、何か手伝えることがありましたら、声を掛けて下さいね」

できるだけ将之の前から姿を消した方がケムヨのためだとシズは控えめに二階へと上がっていった。

自分が何か言ってケムヨの不利益になつては困るからだった。

「もう、仕方ないわね。どこまであんたはずうずうしいのよ」

ぐちぐちといいながら靴を脱ぎ、結局はなす術もなく将之を家に上げてしまった。

しめたとばかりに将之は上がりこみ、そして二度目はじっくりと家の中を見渡す。

「あのさ、部屋はまだあるみたいだけど他にここの部屋を借りてる人はいろのか？」

「えっ」

「なんだかこの建物不思議なんだよな。見かけがばろいのに中はそうでもないだろ。古ぼけているけど、それは価値あるアンティークで結局は高そうに見える。一体ここはどういうところなんだよ」

「あんたが気にすることないでしょ。分かったから、早く飲もう」
余計な詮索をさせまいと、ケムヨは将之を押し込むように部屋に入れる。

それが将之の思う壺に嵌っていると気がついてても、そうなるように何かに操られているような錯覚を覚えずにはいられなかった。

結局は将之を突き飛ばすように部屋の中に入れてしまったが、自分は何をやっているのだらうとドアを開けてからケムヨは頭を抱えてしまった。

不可抗力。

そう思えるくらい自然とそうなってしまう。

深く考えても仕方ないと、この時は諦めるように将之に視線を向けた。

将之は押し込まれた反動でぐらつきながら、部屋の真ん中に立ってケムヨを見つめる。

良く見ればケムヨはきつちりと化粧をして、キャリアウーマン風にスーツを着こなし気品があった。

「なんかえらく今日は雰囲気が違うな。気合が入っているというのか、艶やかさがある。一体どうしたんだ？」

「別にどうもしてないわよ。とにかく早くそれ頂戴」

本業の時はそれなりにきつちりとしたものを着て、化粧もしつかりとすることをつい忘れていた。

しかも腕にはロレックスの時計をつけている。

また何か言われると困るので、手を後ろに回しできるだけ上着の袖の中に押し込んでいた。

将之はあなどれない。

敏感に変化を読み取っている。

なんだか追い詰められて焦る化けた狐のような気分になった。

主導権を握られてたまるかと、缶ビールを手渡す将之の手から引く手繰るように受け取った。

そして机に備え付けられている椅子を引っ張り出してどさっと座り込む。

「将之も適当に座って」

ケムヨに声を掛けられ、将之は辺りを見回してベッドの上に腰掛けた。

「とにかく、飲んだらすぐ帰ってよ」

「またそれかよ。いいじゃないかゆっくりしても」

「ダメ。なんでそう、いつも強引に押しかけてくるのよ」

「プリンセスに会いに来るついでだし、ケムヨがここに住んでるから挨拶くらいした方がいいと思って」

「だからそれはこじつけでしょ」

「それじゃ、なんていえばいいんだよ。ケムヨに惚れてそれでアタックするために来ているって言えば満足するのか」

「満足も何も、それは結局はストーカーじゃない」

「もうそれでいいや」

将之は開き直って、缶ビールのプルトップを引っ張った。

「それじゃ、ストーカー認定に乾杯」

「ちよっと自分で認めてどうするのよ」

将之はケムヨの突っ込みを笑顔で受けて愉快とばかりにビールを飲む。

少しぬるくなっていたが一人で飲むよりよほど美味しく感じた。

結局は将之の思う壺にケムヨは踊らされる。

ケムヨも反論するのに疲れて缶ビールを飲み始めた。

一口飲めば、喉が渴いていたことに気がつき、そのままぐりと飲み続ける。

「おつ、いい飲みっぷり。ケムヨは酒に強い方か？」

「かもしれないわ。昔はあまり飲まなかったけど、一度飲んだら味を覚えてたって感じかも」

ビールの味を知ったのは翔と出会った頃だった。

あの頃は仕事に忙しく、それに追われ続けだった。

そして終わったときの達成感と共に飲むビールが美味しく感じたものだった。

そこに一緒に仕事のことを熱く語り合える翔が目の前に居て、次第に気持ちを通じ合って心もウキウキだし、いつしか恋に変わっていった。

楽しい思い出もあり、同時に悲しい思い出もある。

「どうした？　なんかどこか別の次元に飛んでいったような目をしているぞ」

「いちいちうるさいわね」

「だけど、物思いに耽っているケムヨもなかなかきれいだった」

将之があまりにも自然にさらりと褒めるから、ケムヨはドキッとしてしまう。

男性からそんな言葉を聞くとは思わなかった。

ここ数年は地味に目立たず暗くをモットーにひたすら自分を押し殺してきた。

それなのにこんな自分に興味を持って追いかけてくる男がいる。将之をじっと見てしまった。

将之はにこりと笑みを浮かべて、美味しそうにビールを味わっている。

そんな姿を壊すのが嫌でケムヨは聞かなかったことにして、同じようにビールを飲んだ。

「なあ、絵を描くのが趣味なのか？」

脈絡もなく質問し、画材道具が置かれているケムヨの机の上に視線を落としながら、将之はおつまみの袋をケムヨに投げた。

ケムヨはそれを受け取り、中から輪っかになったイカの燻製を取り出して、輪ゴムをかじるようにして答えた。

「下手くそだけど、描くのは好きなんだ。絵を描くのはストレス発散にもなる。頭の中に浮き上がったイメージを絵に表しているときって、没頭して楽しいんだ」

「なんか分かるような気がする」

「そこには辛いことも嫌なこともなくて、楽しい自分だけの世界があるの。そう思っているときがなんだか心落ち着いてくるんだ」

「それは妄想になるんだろうけど、それが広がれば広がるほど想像力がかきたてられる。好きなものには楽しい一時に違いない」

「まあ、自分の腕次第だから、結局は上手く描けないと意味がないんだけどね。だけど、将之も同じように思ってくれるとは意外だ。もしかして将之も絵を描くの？」

「いや、俺は描かない」

将之は缶を口元に持っていきビールを飲んだ。

「それじゃ将之の趣味は何？」

「俺の趣味か。これといって思いつかないや」

「好きなこととか、やりたいことないの？」

「そうだな、じゃあ敢えていうなら、セックス」

ケムヨは立ち上がり、ツカツカツカと将之の前に立つと、頭をばしっと叩いた。

「バカ！」

「いてっ、いきなり何するんだよ」

「あんたが馬鹿なことを口走るからでしょうが」

「正直にやりたいこといっただけじゃないか。俺、男だぜ。それくらの欲望もつたっていいじゃないか」

「だから、それをいちいち私に言うな」

「聞いたのはそっちじゃないか」

「もつとまともな答えが返ってくると思ったわよ。それじゃ今日はこれまで。退場」

ケムヨはドアを指差す。

「おいっ、まだ飲み始めたところじゃないか」

「そんなのどうでもいいの」

ケムヨはオウムのようにギャーギャーと騒ぎ立てて将之を責め立てていた。

将之はそれも悪くはないとやっぱり微笑む。

「今日のケムヨは怒った顔もクールでかつこいい」

そう言って、残りのビールを飲み干した。

ケムヨは固まって黙り込んでしまった。

将之の口から飛び出る言葉はケムヨを一瞬でも黙らせるには効果的だった。

将之はまた新たな攻略方法を見つけてにんまりと不気味に片方の口角を上げた。

「な、なによ」

「いや、別に。少しずつだけどケムヨのことがなんか分かってきたような気がする」

「そんなこと分からなくていいの。とにかく帰って」

「残念だな。もう少しゆっくりしたかったな。セックスなんて簡単に口走る男は信用おけないってか」

「そうよ」

「男なんて、考えることは皆一緒なの。惚れた女が目の前に居たら、ついついそっちの想像力をかきたてられるのさ。俺はむつつりじゃないからつい口にしたってしまうのさ」

「だから、私達はまだそんな話ができるほど仲良くなってないじゃない。女にいきなりそういう話はするもんじゃない」

「28にもなつて案外と初心なんだな。もしかしてまだ経験ないとか？」

これ以上この話はしたくないと、ケムヨは将之を焼印が押せるくらい睨みきった。

「おお、怖」

「言っておきますが、私もそれなりの恋の経験はあるわよ」

ついムキになって言ってしまう。

「そうだろうな。ケムヨは結構いい女だぜ。それなのにどうして男に全く興味を失くしたんだ？　しかも結婚もしないなんて」

「別にいいじゃない。結婚だけが女の幸せとでも言いたいのか？　私は一人で生きてく決心をしたのよ」

「だけど、女が一人で生きていくって生活苦しくならないか？　ケムヨはパートだし、これからどうやって一生分のお金を稼いでいくんだよ」

「だから、それは……　今から稼いで貯めるわよ」

家業のことは説明できるわけでもなく、苦し紛れに答えた。

「でももし職をなくしたり、働けなくなったりしたらどうする？

心細くないのか？　そんなときに一生を添い遂げられるパートナーが欲しいと思わないか？」

「それじゃ将之が私と結婚して養ってくれるとも言っの？」

「いや、それは飛躍し過ぎ。そこまで俺はまだ考えてる訳じゃないけど」

「じゃあ、安易に私を好きだの惚れただのって言わないでくれる？」

「俺は恋を楽しみたいだけじゃないか。そっちこそ付き合ってもないのにいきなり結婚の話はないだろ」

「それじゃ結局はただ単に遊びってことになるじゃない。私はもう28なのよ。この年でそんなリスキーな恋ができると思う？」

「それじゃやっぱり結婚を意識してくれる人じゃないと付き合いにくいってことなのか。それってなんか矛盾してるぞ。ケムヨは結婚を考えてないって言ったんじゃないかったのか？」

「だから私はもう恋なんてしないつもりなの。付き合うこともしない、つまり男は要らないってことよ。それに私一人で生きていくくらの準備はしてるわよ」

ケムヨはどんどん興奮してくる。ここまで自分をさらけ出したことないくらい、本気で将之に突っかった。

「分かったよ。そう怒らなくてもいいじゃないか」

「言い出したのはあなたでしょ」

「そうだけど、そんなにムキになるなんて思わなかった。よほど振られたことがトラウマになってるのか？ 一体どんな男と付き合ってたんだよ」

「だからそれもあなたに関係ない。それに終わったことはもうどうでもいいの！」

最後は力強く八つ当たるように将之に言い切ったが、本当にどうでもいいのだろうか。翔はもうすぐ戻ってくる。

ケムヨは将之の前で強がっていたが、翔のことを考えると心の傷は癒えずにただ冷凍保存されていることに気がついてしまう。

暫く俯いていたたまれない心を支えるように立っていた。

突然動かなくなったケムヨを見ることで、将之は深い失恋の傷跡を見てしまった。

本気で愛したに違いない。

そうじゃなければここまで絶望的にならずにその後も新しい恋をすることを恐れなかっただろう。

失ったものに執着してしまう心。

その気持ちは将之には理解できた。

「そっか、よほどそいつのこと好きだったんだな。辛いこと聞いて悪かったな。今日のところは俺、帰るよ」

静かにベッドから立ち上がり、空になった缶をケムヨに押し付けた。

「リサイクルしておいてくれ」
そしてドアに向かった。

「将之、忘れ物」

まだ袋に入っている飲み物をケムヨが渡そうとする。

「それはやるよ。お詫びの印。後でゆつくりと飲んだらいい。酒で辛いこと忘れられるならいいけどな」

「将之……」

「俺、好き勝手なことずけずけと言っちゃったけど、ケムヨの気持ち分かるような気がする。実は俺もそうだから」

「えっ？」

「あつ、そうだ。今週の土曜日空いてるか？」

「土曜日？ ええ、空いてるけど」

「わかった。それじゃ迎えにくる」

「ちよつと、用件もなしにいきなり迎えに来るってどういうことよ」

将之はドアを開けて廊下へ出た。

ケムヨは話を中断されて、気になって後を追いかける。

「ちよつと、待ってよ。土曜日、なんで迎えにくるのよ」

「きつと、ケムヨも気に入と思うよ。だから楽しみに待ってて」

「あのさ、なんでそう脈絡もなく次から次へと先に進んでいくのよ」

将之は靴を履いて顔を上げる。

「興味が湧くようにもっていかないとケムヨはその場で立ったまま動こうとしないだろ。それに俺決心したよ。俺がケムヨをその苦しみから引き出してやる。いつか言っただろ、俺が救ってやるって」

「だからそれは……」

「俺がそいつのこと忘れさせてやるよ」

ケムヨはまた将之の言葉に縛り付けられてしまった。

なんともありふれたくどき文句。

それなのにその言葉を耳にすると、化学反応を起こすようにドキ

ドキしてしまうから不思議だった。

「それじゃ土曜日の昼過ぎに来るからな」

「あつ、将之っ！」

将之が玄関のドアを開けて出て行った。

咄嗟にそこにあつたシズの履物を拝借してまた後を追う羽目になつてしまった。

年下だというのに、それを感じさせないくらいに将之はリードして行動力を発揮する。

ケムヨは結局自ら引き寄せられるように引つ張られていた。

だが、外に出たと思つたはずの将之はドアを開けたまま玄関で突っ立っていた。

ケムヨは弾みで将之の背中に顔を激突してしまった。

「ちょっと、あなたね、なんで立ち止まったままなのよ」

辛辣な匂いをツーンと嗅いだように痛みを伴った鼻を押さえて、ケムヨは文句を言う。

「ほら、プリンセスが来てるんだよ。俺の置いた煮干を食べている」
将之の背後からそつと顔を出すと、夕方の日が暮れかけた薄暗い中、門の端の辺りに猫がうずくまって尻尾がうねっているのが見えた。

将之はそつと近づくと、気配を感じて鉄格子のような門の間を覗くようにプリンセスが様子を伺いだした。

「チチチチチ」と舌打ちして中腰になりながら一步一步プリンセスとの距離が縮まっていく。

後ろで見守るようにケムヨは将之の行動を見ていた。

大きな体の大人の男なのに我を忘れて猫に近づくしぐさが滑稽であり、またそれが可愛いとさえ思ってしまう。

猫はその間、動かず将之をじっと見つめていた。

「その煮干、俺が用意したんだぞ。旨かったか？」

返事が返ってくるわけでもなく、猫相手に恩義を着せるように声を掛ける。

将之が近づいて手を差し伸べても門を挟んでいたので、プリンセスは安全だと思ったのか逃げなかった。

門の隙間に顔をつ込むように鼻をヒクヒクと動かし将之の指の先を嗅いでいた。

将之の大きな手は門の隙間に入り込めなかったが、指先で猫の顎を撫ぜることができた。

「おっ、触れたぞ」

素直に喜び、しゃがんだ姿勢でケムヨに振り返った。

さっきまで言い合いをしていた男が、体を丸めて小さな猫相手に笑顔を見せている。

そんな姿を見せられたら反則じゃないと、将之の可愛らしさに少し母性本能をくすぐられてしまった。

将之は次に進もうと立ち上がりそつと門を引く。

猫は一瞬で体に緊張が走り、強張った姿勢になった。じつと将之の行動を警戒して見ている。

いくらそつと門を開けても、ギーッと錆で擦れる不快な音が響くとプリンセスは危険を察知したかのようにくるつと向きを変えて逃げてしまった。

「あつ、プリンセス」

将之が道路側に出たときは、すでに2メートルくらいは離れてしまった。

何度も「チチチ」と舌打ちをするが、プリンセスは不快な音が耳に残って恐怖心を植え付けられたのか寄って来る気配がなかった。

「まあ、いいか。今日は少し触れたし、ここに来れば餌も貰えると分かったことだろう」

暫くじつと見つめ合いが続いたが、後ろから来た車に蹴散らされるようにプリンセスはまたどこかへと身を隠してしまった。

「プリンセス、またな」

将之はふーっと力を抜くように息を吐いていた。

「まだまだ懐かないみたいね」

「まだ知り合って日は浅いから仕方がない。けど少しは触れる事ができたよ。それになんとなく俺が餌をくれる人ってプリンセスは気がついたと思う。あと少しで警戒心を解けるかもしれない」

「そんなに簡単にいくかしら。あの猫は手強そうよ」

「見かけはそうでも中身はまだそうと決まった訳じゃない。ゆっくりと接触してお互いを分かり合えば必ず心は開けると思う。俺は信頼してくれるまで諦めずに何度でも接触するよ」

将之は真剣な目つきでケムヨに語っていた。

その言葉は猫のプリンセスに言ったものではなく、まるで自分に語られているようで、ケムヨはその言葉になんて返していいのかわからなくなる。暫く目を逸らすことができずに見つめていた。

将之はニコツと笑ったが、日が暮れかけた薄明かりは将之の黒い瞳を柔らかくマイルドにさせて、その微笑が一層優しく見えた。

「そのまんまの俺を見てくれ」

「えっ？」

「それじゃ、あさつての土曜日にな」

「明日はプリンセスに会いにこないの」

「明日はちょっと仕事で忙しいんだ。だから俺の変わりにプリンセスに餌やっててくれないか」

「なんで私が」

「頼んだぞ」

また無理に押し付けて、そして将之は去っていった。

薄暗い中で背広の背中が妙に大きく見える。

（私よりも年下なのに、あのえらっそうな存在感はなんなんだ）

どんなに言い争っても、意見が食い違っても、遠慮なく自分の言

いたいことを言ったこともあり、対等に向き合えている。

その後は根を持つこともなくさりとそれで終わってしまう。

将之はまたもう一度振り返って大きく手を振った。

ケムヨはやはりどうしてもそれに乗せられて無視はできないと挨拶程度に手を振り返す。

「将之の奴め」

憎たらしいと思うのに、ケムヨは暗闇を隠れ蓑にして笑っていた。

翌日の金曜日。

ケムヨがパート先の会社へ出勤する。

パートだが、ケムヨのポジションは他の人たちと違いフレキシブルになっている。

一週間に二、三日程度働けばそれでよく、前もってどの日を働くかはスケジュールを一ヶ月ごとに組んでいた。

翔が海外へ転勤にならなければ、ケムヨは即仕事を辞めるつもりだった。

毎日顔を合わせるなんて考えられなかったからだった。

だが、翔と別れた直後、偶然にも翔は海外転勤を命じられたために、ケムヨは会社に残る選択をとることになる。

かつてケムヨは翔と一緒にプロジェクトを任せられ、しっかりと利益も出していた。

そんな活躍した社員があつさと失恋という理由だけで辞めてしまつのはおかしいと、専務の須賀が引きとめたことも一つの要因だった。

表向きはパートで雑用係だが会社内のことを良く知り、それぞれの部署で手助けができるといつでも使える臨時のスタッフのようにケムヨを配置することを提案。それは充分優遇の対象と言つてよかった。

ケムヨはこの会社では陰ながら支えるという特殊なポジションを授けられたのだった。

そういうことを知っている者は少なく、暗く地味に会社で過ごし、

雑用しかしてないと思われているので誰もケムヨの存在には気にも留めてない。

ケムヨ自身、他にも仕事を持っているので、こういう働き方は都合がよかった。

殆ど幽霊のように誰の目にも留まらない、ひっそりと地味に働ける。

しかし、翔が戻ってきたらどうなってしまうのだろう。

それが悩みの種であったが、それ以前にもうすでに何かが狂い始めていた。

「ケムヨさん、おはようございます」

ケムヨが部署のデスクの上を雑巾掛けしてるとき、留美が丁寧に挨拶をする。

同じようにケムヨも返すが、留美の表情がいつになく暗かった。

「留美ちゃん、どうしたの。なんだか元気がないけど」

「それが、優香のことなんですけど」

「優香さんがどうしたの？」

「合コンに参加できなかったことに未だに拘ってるんですけど、さらに真理恵先輩がその合コンで義和さんと仲良くなったことを知ってしまったてかなり気に入らないみたいで、私に八つ当たってくるんです。それで疲れちゃって」

「優香さんそんなに拘ってるの？」

「そうなんです。私は参加したけど何もなかったよって言っても聞く耳持たずで」

二人してこそこそ話していたつもりだったが、いつの間にか優香が後ろにやってきて口を挟んできた。

「ちょっと、二人して私の悪口を言ってるの？」

きつい目をさらにつり上げ、イライラの電波が目に見えるように突っかかってくる。

「別に悪口なんていつてないわよ。ケムヨさんに私の事を聞いてもらってただけ」

留美は焦る様子もなく、優香に聞かれたことで自分が困っていることを分かってもらえるいいチャンスだと思った。

「ふん、何よ、皆で意地悪して。どうせ私を最初からのけ者にするつもりであんなこと計画したんでしょ」

優香は涙目で訴える。

泣くほどのことなのかとケムヨは口を半開きにして驚いていた。しかし、夏生の計画した合コンは一度キャンセルになったと連絡してただの食事会と嘘をついた時点で少し意地の悪さも目立つかもしれない。

立場は違うが、ケムヨ自身も騙されてあの席にいたときは腹が立ったので、その気持ちに優香の気持ちと同じ類のものなのだろうか、潤んだ優香の瞳をぼかーん見つめていた。

だがそこには共通点はなかったと、優香の強く睥睨する目つきではっとする。

優香は見えていて痛いほどに、地位とお金のある男を結婚相手に求めて必死になりすぎている。

ケムヨとは全く立場が違い、優香の気持ちを分かってあげられないことで逃げるようにケムヨは目を反らした。

それが優香のプライドを益々傷つける。

ケムヨを敵意の持った目で睨みつけ、そして留美以上に八つ当たりするような蔑んだ言葉を吐いていた。

「ケムヨさんは、もう女でいること自体諦めてるもんね。仕事も派遣よりも地位の低いパートで雑用係。お洒落もせずにもいつも暗くて、最初からいい男なんて引つ掛けられないと分かっているから気が楽でいいわね」

「優香、失礼だよ。ケムヨさん、ごめんなさい。優香は今精神不安定みたいなもので……」

留美はフォローするが、ケムヨは気にしていないと薄っすらと笑顔を見せる。

もし自分が優香の立場にいたら、同じように思うのだろうか。少しだけ想像力を働かせて、何もない立場の自分を想像する。

ケムヨが全てを諦め、投げやりでいられるのも自分の立場が安定しているからできることであると強く思う。

この先も保障された生活があると人は好きに生きられる。

必要なものを十分に蓄えていないものは自らそれを求めてよい条件のものを得たいと思うようになるのだろう。

ケムヨはやはり優香とは違い、頭の中でいろいろと仮定しても、実際の自分の立場があるだけで同じように感じることは皆無だった。

「優香さん、私のこと悪く言ってもいいけど、それを会社に持ち込んで留美ちゃんを巻き込まないであげて下さい。ここは働くところですから、仕事だけはしっかりした方がいいですよ。それじゃ私は自分の仕事がありますので」

ケムヨは一礼をして去っていく。

優香は気に入らないと、益々怒りに満ちた態度を顔に浮かべてい

た。

留美はこれ以上付き合いきれないと諦めるように首を横に振り、そして優香を見捨てて自分の仕事場へ向かった。

優香は悔しくてたまらず、肩を震わせて暫くその場にめり込みそうになるくらい立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8023w/>

星影ロンリーハート

2011年11月24日09時47分発行